

2021年7月1日

みずほディーラーズアイ (2021年7月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 108.50 ~ 112.50

市場営業部 為替営業第二チーム 竹内 和拓

■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は総じて底堅い展開。月初109円台半ばでオープン、米金融政策の早期テーパリング観測を背景に109円台前半は下支えされた。3日に発表された米5月ADP雇用統計が事前予想を上回る等、堅調な米経済指標を背景にドル/円は110円台に上昇。バイデン米大統領がインフラ政策に係る法人税増税計画見直しとのヘッドラインも上昇を後押しした。4日に発表の米5月雇用統計は、失業率や平均時給が事前予想を上回る改善を示したものの、非農業部門雇用者数が予想を下回った事で、ADP雇用統計を受けた過度なテーパリング期待や景気回復期待を吐き出す形で、米長期金利低下と共にドル/円は109円台前半に反落。サポートラインとして意識されている109円台前半の水準は維持されたものの、早期テーパリング観測が巻き戻される中、上値も限定的。ECB政策理事会や米CPI等の主要イベントを控え、ドル/円は110円台半ばで売買交錯した。10日、ECBが政策金利据え置きを発表し、ECB総裁の記者会見においてPEPP縮小は次期尚早との認識が示されたが、予想通りの内容で影響は限定的であった。また発表された米5月CPIは予想を上回るヘッドラインとなり、一時的にドル買いが強まり一旦109.80まで上昇したものの、ヘッドラインの内容が明らかになるに連れ一時的な要因が大きいと認識された事や、FRBがインフレ上昇は一時的とのスタンスを維持した事から、米長期金利低下と共にドル/円は伸び悩んだ。翌週に米主要経済指標や米FOMCを控え、一段ドルを売り込む展開とはならず、1.40%台前半まで低下していた米10年債利回りが1.50%を回復する中、ドル/円は110円台前半まで反発した。注目された米FOMCでは政策金利が据え置きとなるも、金利予想ドットチャートの中央値が2023年末までに50bp利上げを見込んでおり、総じてタカ派的な印象が強い内容となった。ドル/円は110円台後半まで続伸し110.82の高値を付けたものの、週末には一部FRB地区連銀総裁から金融政策に関するタカ派的なコメントにより利上げ観測が高まった事でドル買いが進行したものの、株下落によるリスクオフモードで円買いも活発化しドル/円は109.72まで下落した。一方、FRB議長が足許のインフレ上昇は一時的だと認識を改めて示した事で、全般的なドル売りの流れの中、緩やかなリスクオンでドル/円は110.79まで上昇。23日にもドル売り、円売りの流れが継続しドル/円は111.11の高値を示現。25日には事前予想比弱めの米5月PCEコアデフレーターを受け、過度なインフレ懸念が後退、ドル売り圧力が強まり110円台半ばまで下落。その後は7月初の米経済指標を控え110円台半ばから後半で小動きで推移した。(30日17時時点)

■ 今月の見通し

7月のドル/円相場は底堅い展開を予想する。

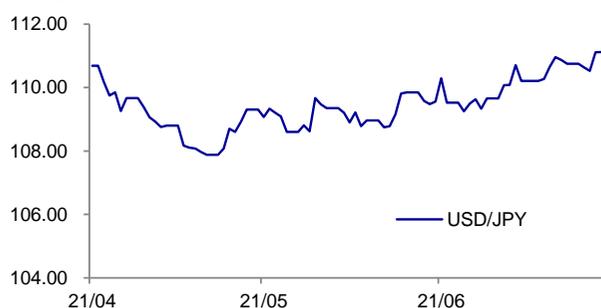
新型コロナのワクチン接種進捗等を受けた経済活動正常化期待によるリスク資産へのフローが、引き続きドルの下支えになると見る。欧米各国では厳しい行動規制等が解除され経済活動活発化への期待感が高まっている。変異株の動向には依然として高い警戒感に残り一部地域では再拡大の懸念も残存する等厳しい状況には著変はないものの、グローバルに見れば回復への期待感が強い。また日本でも緊急事態宣言が解除され7月にオリンピック開催を控えており、経済正常化への思惑が高まりやすい。斯かる状況下、リスク資産全般、ドルは堅調な値動きとなる可能性は高い。一方、経済活動正常化は新型コロナウイルス感染再拡大と表裏一体である事は自明で、また感染力の強い変異株の市中感染リスクは排除しきれず、一定の悲観論は残存する事から、ワクチン接種の進捗状況や変異株の動向を睨みつつの状況は当面継続しそうだ。

ファンダメンタルズに目を向けてみると、米経済指標は雇用統計では非農業部門雇用者数が事前予想を下回る数字であった事や、失業率は改善したが労働参加率が上昇しておりポジティブな結果とは受け止められなかった。但し数字自体は高い期待に応えられなかっただけで、内容としては悪くなく、根底にある回復基調は維持されると見ている。また足許のインフレ上昇懸念を背景としたテーパリングに関する期待感も徐々に高まっていくと想定。FED高官等による地均し的な発言は今後も続くとする。FOMCでも2021年インフレ見通し(PCEコア)が2.9-3.1%と前回(2.0-2.3%)から大きく上昇、ドットチャートにおける利上げ見通し前倒しや利上げを見込んでいるメンバーの増加等、総じてタカ派的な印象が強かった。一方、パウエルFRB議長の記者会見では、「顕著な進展には程遠い」と釘を刺すようなコメントも発せられており、FRBがインフレ上昇は一時的とのスタンスと整合的であった。暫くは早期テーパリング観測の盛り上がりや、過度な期待感に対する揺り戻しも相応にあり、両者の綱引きは継続しそうだ。

総じて、ドル/円相場は底堅い値動きを想定する。米FRBのテーパリング・利上げ観測でドルが買われやすい地合いに加えて、ファンダメンタルズ面でも主要国の中で4-6月期のGDP成長率がマイナスになるのは日本だけという観測もあり、円売りの流れは継続すると予想する。

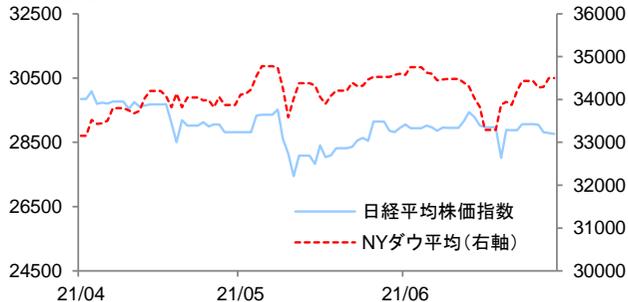
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	ISM製造業景況指数	5月	61.0	61.2	60.7
6/3	ISM非製造業景況指数	5月	63.2	64.0	62.7
6/4	非農業部門雇用者数変化	5月	675k	559k	278k
6/4	失業率	5月	5.9%	5.8%	6.1%
6/10	CPI (前月比)	5月	0.5%	0.6%	0.8%
6/15	PPI (前月比)	5月	0.5%	0.8%	0.6%
6/15	小売売上高速報(前月比)	5月	-0.8%	-1.3%	0.9%
6/15	NY連銀製造業景況指数	5月	22.7	17.4	24.3
6/15	鉱工業生産(前月比)	5月	0.7%	0.8%	0.1%
6/17	FOMC政策金利		0.00-0.25%	0.00-0.25%	0.00-0.25%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	15名	112.00 ～ 109.00	ベア	4名	111.25 ～ 108.00	※ レンジは中心値
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------	-----------

田中	ブル	112.50 ～ 109.00	FEDはタカ派シフトしテーパリング議論の開始を決定。今後はコロナ変異株の状況やインフレを含め経済指標を確認しながらの展開となるが、日米のコロナワクチン接種状況格差や金融政策の方向感の違いからドル円は堅調地合いが続こう。	小野崎	ブル	112.00 ～ 109.50	6月FOMCを契機にテーパリングへの議論は進む。円が先行される理由もなく米経済の回復とともにドル高進行。4月以降、じりじりとレンジを切り上げてきた中、6月には年初来高値も更新し一層の上昇を見込む。
竹内	ブル	112.50 ～ 108.50	引き続き、米経済指標動向を踏まえ、テーパリングと利上げ観測の地均し相場を想定。変異株への警戒や金融政策に対する過度な期待感を調整し堅調地合いは継続か。日米の経済回復に向けたGapもドル円を後押し。	玉井	ブル	112.00 ～ 109.00	FRBによる早期緩和縮小が意識される中、ドル買い地合いを見込む。ただテーパリング議論の詳細が決まるのはもう少し先になりそうであること、新型コロナの変異株拡大のリスクもあり上値は限定的と考える。
筒井	ベア	111.50 ～ 107.00	テーパリングについて、市場はかつてのパターンからドル高を鉄板シナリオで見込んでいる。新たな四半期が始まり、新規ポジションは上旬にドル高を狙って構築されるだろうが、中旬には大きく調整されるだろう。	原田	ブル	112.00 ～ 109.00	堅調な経済を受けてテーパリングの早期開始観測が強まっており、失業保険の失効が増え始めるにつれて、雇用関連指数も上向きとなるだろう。かかる状況下、ドル買いの地合いが続くと思われる。ドル円も引き続き底堅い推移を見込む。
山岸	ブル	112.50 ～ 109.00	経済活動の正常化進み、また資産価格高騰などの弊害も大きく、米FRBによる危機対応の強い金融緩和は方針転換必要か。年末～年初のテーパリング開始と来年の利上げが市場織り込み通り進めば、ドル円も高値圏での堅調推移が続くと予想。	大庭	ブル	112.00 ～ 109.75	6月FOMCでややタカ派色が強まったもののドル円は経済指標を見ながらの慎重な動き。4月下旬からの上昇トレンドチャネルの中でじり高を予想。日足のボリンジャーバンド+2σを超える水準では売りに警戒。
牛島	ブル	112.00 ～ 109.00	FRBは利上げに対しては慎重的なスタンスである一方、テーパリングには前向きな姿勢が伺える。雇用市場の回復が確認できれば、米短期金利上昇とともにドル高が進むだろう。	上遠野	ブル	113.00 ～ 109.00	FOMCの内容を受けたFRBの金融政策正常化に向けた期待感から米金利が底堅く、ドル円は素直に上昇地合いを継続か。大型のインフラ投資など大規模経済支援策も物価上昇を後押し。
田坂	ブル	112.50 ～ 109.00	6月FOMCにおいて出口に向けて舵を切り始めたFRB。従来通り円を買う理由が見当たらないことに加え、日米金利差拡大という要素も加わり、4-6月期停滞気味となったドル円もレンジを小幅に切り上げるだろう。	小林	ブル	112.00 ～ 109.50	ドル安局面でも、円高には反応しにくい状況が継続すると予想。ドル高が進展するには、テーパリング時期の前倒し期待、利上げへの期待感が高まる必要があり、そのためには経済指標の改善を確認する必要がある。
尾身	ベア	111.00 ～ 108.00	ドル売りの流れは継続していると考えている。背景は、低金利政策の継続、財政拡張政策、世界的な通貨安選好の流れ。但し、米長期金利の上昇や株価下落によるリスクオフなどが、対円ではドル買いを起こしておりスピードは緩やかだろう。	逸見	ブル	112.00 ～ 109.00	6月FOMCにてタカ派な金利予想が示されたものの、米金利は1.5%付近を推移しており、上昇余地を残している。今後、緩やかにテーパリングに向けた地均しが進むと考えられ、米金利上昇を背景にドル円は底堅い展開を想定。
上野	ベア	111.00 ～ 108.00	6月はFOMCを受けてドル買いが強まった。しかし、FRBにしてもテーパリングの織り込みには慎重になるはずで、FOMC以降、米金利は横ばいの推移となっている。イベントを状況下、水準的にもドル円は調整が出やすいか。	大谷	ベア	111.50 ～ 108.50	6月のタカ派なFOMCを受けても米金利の上昇は一時的に留まっている。またパウエルFRB議長がハト派なスタンスを継続していることやコロナ変異株への警戒感などに鑑みるとドル円の上値は限定的であると考えられる。
山口	ブル	112.50 ～ 109.00	主要国の中ではタカ派姿勢を見ており、今後発表される経済指標次第では出口の議論が早まる可能性も。米金利が再び上昇する展開となるとドル円も上昇トレンドを継続すると予想。	鈴木	ブル	112.00 ～ 109.50	警戒感が残る株式市場の調整や変異株の拡大が深刻化しても、資金が円に流れること考えづらく、ドル円の下値は限定的。それ以上にテーパリングの早期開始に対する期待感のほうが根強く、引き続き上値を追う展開を予想。
				大熊	ブル	112.00 ～ 109.00	堅調な米経済を背景にFRBメンバーのタカ派化が鮮明になっていることに鑑みると、ドルの底堅さは継続か。東京五輪後のコロナ感染拡大により日本経済の低迷が長期化するとの思惑もドル/円の支援材料になると思われる。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1700 ~ 1.2000
EUR/JPY 130.50 ~ 133.50

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

■ 先月の為替相場

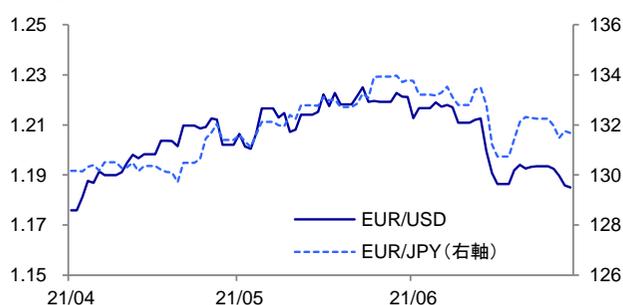
6月のユーロ相場は総じて下落。月初から米5月ISM製造業景気指数の結果を受けたドル売りが対ユーロで集中し1.22半ばまで上昇するも、3日には米経済指標の良好な結果を受けドル買い優勢の中1.21前半まで下落し4日に一時1.2104まで下げ幅拡大。翌週7日は欧州主要国の株式市場が堅調に推移する中でユーロ買いも強まり一時1.22台を回復。9日も米長期金利の1.5%割れを受け1.22台前半で底堅くも、翌日ECB政策理事会を控え積極的にユーロを買い進める動きは続かず。10日、注目されたECB政策理事会では政策金利やPEPP(パンデミック緊急購入プログラム)の購入ペースについて据え置きを発表。発表直後はユーロ買いで反応し、米5月CPIが予想を上回ったことでドル/円が上昇する展開にユーロ/円は一時週高値となる133.74円まで上昇。ただし、ラガルドECB総裁が理事会後の会見でPEPP終了の議論は時期尚早と発言したことを受け、ユーロ売りに転じる展開。翌11日も独債利回りの低下をにらみつつユーロは1.21を割り込み。14日は特段材料もないまま軟調に推移し、1.21 ちょうどを挟んだみ合った後、15日には米国とEUの航空機補助金をめぐる貿易紛争解決期待から、一時週高値の1.2147まで急上昇。もともと、16日はFOMCでの経済見通しの上方修正や17日開始の早期化を示唆するタカ派な内容を受けてドルが強含み、1.20 台半ば付近まで急落。その後も米金利が堅調に推移したこと受けユーロドルは、1.20 台を割り込む展開。17日、レーンECB理事がパンデミック緊急購入プログラムの終了議論は尚早と発言するとユーロ売りが更に強まり、1.1890まで急落。18日もドル買いが強まりユーロは1.1848まで下値を切り下げ。翌週21日、日経平均の大幅下げを横目にリスクオフ地合いの中ユーロ/円の下落につれユーロ/ドルも引き続き1.1848レベルで軟調推移。もともと22日はパウエルFRB議長の本派な議会証言が確認されたことでドル売りが強まり1.19半ばまで上昇。23日も前日のパウエル議長の本派発言によってリスクセンチメントが改善する中、堅調に推移。加えてドイツの6月PMIが予想を上回ったことがユーロ買いをサポートし、1.1970付近まで続伸。ただし買い一巡後は、米金利の上昇に圧迫され、1.19前半まで下落。24日は新規材料もなく、1.1930近辺でもみ合いとなるも翌25日は米のインフレ懸念が一時的に後退したことを受けドル売りとなる中、1.19台後半まで上昇。もともとその後は米金利が再び上昇する流れに、29日には再び1.19台を割り込むなど上値の重いまま月末を迎えた。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場はコロナからの経済回復を一定程度好感しつつも、域内での完全回復に主眼を置いた当局の金融緩和の長期継続予想、併せて6月FOMCにてタカ派寄りの傾斜が示されたFRBとのスタンスの違いが鮮明となったことでユーロは引き続き上値の重い展開を予想する。足元、コロナ変異種拡大への懸念が煽るものの、ワクチン接種者数の拡大に伴ってユーロ圏の景況感は改善の兆しが出てきていることは一定程度認められる。6月29日に発表されたユーロ圏6月景況感は21年ぶりの高水準となり、ワクチンの普及が進んだことによる経済再開がサービス業を中心に回復を後押しした格好。また6月のECB経済見通しにおいては、GDP成長率およびインフレ率予想が前回(3月時点)から上方修正(GDP成長率は2021年:4.0%→4.6%、2022年:4.1%→4.7%、またインフレ予想は2021年:1.5%→1.9%、2022年:1.2%→1.5%へ)されたことで、経済先行きについても明るい兆しとなった。但し、金融政策は現状スタンスから変わらず。6月ECB政策理事会では現行政策金利維持が示されたほか、PEPPについても1-3月期から加速させた4-6月期ペースを維持。総額1兆8500億ユーロとされる枠で、少なくとも2022年3月末までは、コロナ危機の局面が終了したと判断されるまで継続する方針を示した。ラガルドECB総裁もその後の記者会見において債権購入ペースに関してはいくつか異なる意見があったとしつつも、経済先行きの不確実性の高さに懸念を示し、現行緩和スタンスを崩さず。直近ではデルタ株はじめ変異種の再拡大にも警戒感が漂っている状況。掛かる中、6月のFOMCではドットチャートのステイプニングやFED高官の相次ぐタカ派寄り傾斜発言などから早期テーバリング観測など米金融政策の出口戦略をめぐる議論が再燃。同月内でECBとのスタンス相違が改めて浮き彫りになった格好である。今月9日にはG20財務相・中央銀行総裁会合、22日ECB、27・28日FOMCとイベントを控えるものの、ファンダメンタルズと域内脆弱通貨とのバランスを保ちながらより難しいハンドリングを迫られるECBにとって大方の当局者が言うように出口戦略をめぐる議論は尚のこと時期尚早感が否めず。今後続くドイツ、フランスと政治の節目に向けた動向も見定めたい向きもあることから、踏み込んだ政策変更なく米欧金融政策の乖離継続がユーロ上値を引き続き抑えるであろう。

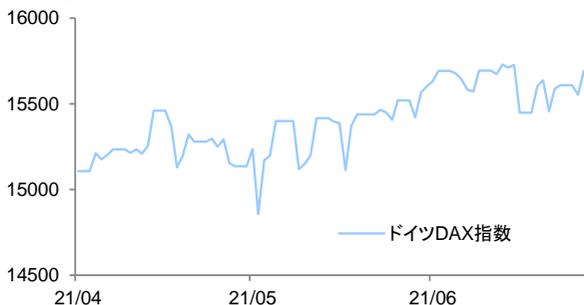
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/4	欧州小売売上高(前月比)	4月	-1.6%	-3.1%	2.7%
6/8	独ZEW景気期待指数	6月	-	81.3	84
6/14	欧州鉱工業生産(前月比)	4月	0.4%	0.8%	0.4%
6/23	欧州マークイットユーロ圏製造業PMI	6月	62.3	63.1	63.1
6/23	欧州マークイットユーロ圏サービス業PMI	6月	58.0	58.0	55.2
6/29	景況感	6月	116.5	117.9	114.5

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	3名	1.2200 ～ 1.1800	ベア	16名	1.2000 ～ 1.1700	※ レンジは中心値
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------	-----------

田中	ベア	1.2000 ～ 1.1700	FEDはタカ派シフトしテーパリング議論の開始を決定。一方のECBは依然として出口政策に慎重であり、金融政策の方向感の違いにユーロドルは上値の重い展開となろう。
竹内	ベア	1.2000 ～ 1.1750	米欧における金融政策に対する思惑の相違がユーロ相場のドライプとなる。テーパリング・利上げと期待感の強い米国に対し、慎重なスタンスを維持する欧州を踏まえれば、引き続きユーロの上値は重い。
筒井	ブル	1.2250 ～ 1.1850	ポジションの傾きで動きやすい相場展開を予想。FEDのテーパリング政策からドル高シナリオを描きやすい環境下、ユーロ安は調整されるだろう。対GBP,CHFでのユーロ高と共にユーロ高に進む可能性が非常に高い。
山岸	ベア	1.2100 ～ 1.1700	緩和縮小路線を鮮明にするFRBに対し、ECBは出口の議論を先送りしており、金融政策格差からユーロは上値重い展開を予想。米金利上昇によるリフレートード巻戻しで、クロス円の円高が強まるとユーロ安も進みやすい。
牛島	ベア	1.2000 ～ 1.1700	先月のFOMC後のドル買い戻しは足元では一服しているものの、FRBによるテーパリング議論が本格化するとドルの買い戻しが優勢となろう。今月末のFOMCに向けて再度下値を模索する展開を予想。
田坂	ベア	1.2000 ～ 1.1750	FRBが6月FOMCにおいて出口に向けて舵を切り始めた一方、米国対比まだまだ出口にはまだまだ遠いECB。二国間の金融政策の違いによりユーロドルは上値重い展開が予想される。
尾身	ブル	1.2200 ～ 1.1800	EURは堅調地合いが継続すると予想している。背景は、ドル売りの継続。リスクは政策金利の引き下げ。政府高官などから利下げ余地の言及が度々見られるが実現の確度は低そうだ。
上野	ブル	1.2200 ～ 1.1800	6月FOMCを受けたUSD高に伴い、6月のユーロは軟調な地合いとなったが、現状はイベントを消化したように見える。追加材料に乏しい中で調整色の強い相場になるのではと考えている。
山口	ベア	1.2050 ～ 1.1750	FRBと比較すると出口への距離が遠いECB。金融政策へのスタンスの違いからユーロは上値重く推移すると予想。また、コロナの感染が拡大するとリスクオフの展開からドルが選好されやすいだろう。

小野崎	ベア	1.2000 ～ 1.1600	テーパリング議論開始の見込めるFRBに対し慎重姿勢のECB。両社のスタンスの違いを勘案すればUSD買い優勢の動向が見込まれる。
玉井	ベア	1.2050 ～ 1.1700	FRBが緩和縮小議論を開始した一方で、ECBはハト派な姿勢を続けており、政策の違いから上値の重い動きを予想。
原田	ベア	1.2120 ～ 1.1710	欧州の経済活動再開期待はあるものの、ECBはハト派なスタンスを維持。テーパリング観測が強まる米国に対し、政策の方向感の違いからユーロは上値の重い推移を予想する。
大庭	ベア	1.1975 ～ 1.1800	金融政策で米国が市場予想よりやや前倒しにテーパリングを実施する動きを背景にEURは上値の重い展開を予想。ただし、FRBの動きに乗じてECBが正常化への布石を投じてくる可能性はあり、買い戻しには警戒。
上遠野	ベア	1.2000 ～ 1.1700	コロナからの経済回復を一定程度好感しつつも、域内での完全回復の主眼を置いた当局の金融緩和の長期継続予想、またタカ派の傾斜が示されたFRBとのスタンスの違いが鮮明となったことでユーロは引き続き上値重いか。
小林	ベア	1.2100 ～ 1.1700	米国ではテーパリングについての議論が持ち上がっている一方で、欧州は引き続き出口戦略には慎重であり、緩和スタンスを変更せず。相対的にドル対比ユーロは軟調な動きが継続か。
逸見	ベア	1.2000 ～ 1.1700	ECBのハト派スタンスが長期化する一方で、FRBは6月FOMCにてテーパリングに向けた地均しに着手。今後、テーパリングに関する議論の本格化が見込まれる中、欧米の金融政策差がユーロドルの上値を重くすると考える。
大谷	ベア	1.2050 ～ 1.1850	6月ECBでPEPPの7-9月期買い入れペース加速維持が公表され、行き過ぎた緩和縮小期待が後退している。域内金利の上昇が抑制される中、ユーロはやや上値重い推移を予想。
鈴木	ベア	1.2000 ～ 1.1750	緩和縮小に関して、FRBでは開始が徐々に現実味を帯びてきている一方、ECBはいまだに見通しが立っていない。FRBとECBの今後の金融政策に対するスタンスの違いにより、対ドルでユーロはさらに売られる展開を想定。
大熊	ベア	1.2050 ～ 1.1700	タカ派に傾いているFRBに対して、ECBはPEPP縮小の議論は時期尚早であると強調しており、金融政策正常化への道のりは遠い。ユーロ高への警戒から口先介入も入りやすく、ユーロの上値は重いと予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3700 ~ 1.4100
GBP/JPY 152.00 ~ 157.00

欧州資金部 マクルヒル ジョセフ

■ 先月の為替相場

6月のポンドは軟調推移の先行から、月の中旬を境に、対ドル、対円が下落。一方、対ユーロでポンドはむしろ高に推移し、月末前に若干の反落を見せた。要するに、月の中旬以降の主要通貨の値動きは、①ドル全面高/ユーロ全面安 ②円の反発(全面高) ③ポンド全面安へと順繰りに推移したことになる。①のきっかけは、16日の米連銀公開市場委員会と同銀早期利上げ観測の高まり。同銀理事の政策金利見通しの中央値が、23年末までに50bpの利上げを見込んでいたこと(従来の同中央値は金利据え置きだった)や、パウエルFRB議長がテーバリング(資産購入策の段階的縮小)に関する議論を始めたことと明らかにしたことなどが「予想以上に鷹派的」な結果と受け止められた。これを受けてポンドは18日にかけて、対ドルでは1.41の手前から1.38台、対円では155円付近から152円台までと大きく下落した。その後は、新規材料が観測されず数日の間は比較的閑散とした値動きとなり、ポンドは買戻し、或いはドルの利益確定売りが入り、ポンドはジリ高が進行し、対ドルでは1.38台手前から1.39台半ばまで回復した。23日に発表された英6月総合PMI(速報値)は61.7と市場予想より弱かったものの、内訳をみると製造業やサービス業が弱くなっているものの、雇用指数はコロナ禍におけるロックダウンの段階的解除もあってか過去最高水準で推移しており、景気回復基調は継続していると考えられる。24日に開かれた英中銀金融政策委員会では、政策金利や試算購入額は市場予想の通り据え置かれたものの、早期の引き締めを警戒するなどハト派的なものとなった。これを受け利上げ織り込み(OISベース)も2022年5月までで12bpsと会合前対比で2bps剥がす形となり、言い換えれば市場の英早期利上げの期待度が低下することになり、それまで1.3980近辺を回復していた英ポンドが、再び1.3900を割れる水準まで下落した。27日以降、月末に掛けては、ポンド全面安の様相が継続し、1.38付近で月を終えた。

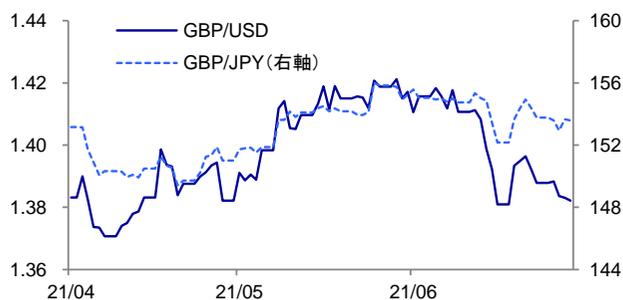
■ 今月の見通し

今月のポンド相場は、底堅い動きを予想する。前述の通り、英景気への予想そのものは悲観的ではない。通貨オプションにおける1ヶ月物25デルタリスクリバーサルも、FOMC後のドル買いでポンドブットオーバーが拡大したものの、現時点ではすでに指標前の水準まで戻していることから、市場においても、ポンド安への警戒感はまだ強くないと言えよう。FOMC、英中銀が終わり、次注目される中銀行会合は7月半ばのECB、8月のジャクソンホールと時間が空くことから、しばらくは底堅くも、方向感を探る展開を予想する。他の注目点としては22日、英財務相が中銀金融政策委員会のプリハ委員の後任として米大手金融機関でチーフエコノミストを務めていたキャサリン・マン氏を任命。プリハ委員は5月の講演にて2022年の利上げ可能性を示唆していたが、マン氏がどのようなスタンスをとるのかが今後注目される。また、英中銀きってのタカ派であったチーフエコノミストのホールデン氏が6月をもって退任(今回の金融政策委員会においても、ただ一人資産購入額の減額に投票していた)。ペイリー総裁がどのような後任を任命するのかといった人事の行方も注目点となる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

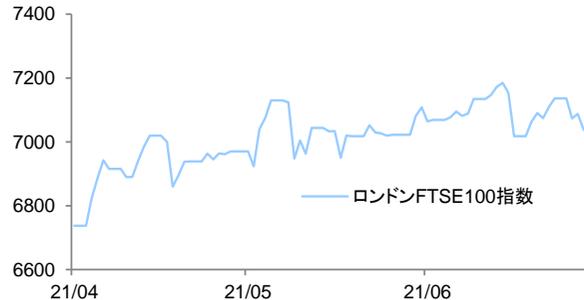
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	マーケット英国製造業PMI(季調済)	5月	66.1	65.6	60.9
6/3	マーケット/CIPS英国サービス業PMI	5月	61.8	62.9	61
6/4	マーケット/CIPS英国建設業PMI	5月	62	64.2	61.6
6/11	Monthly GDP (3M/3M)	4月	1.60%	1.50%	-1.50%
6/11	鉱工業生産(前月比)	4月	1.20%	-1.30%	1.80%
6/11	製造業生産(前月比)	4月	1.50%	-0.30%	2.10%
6/15	ILO失業率(3ヵ月)	4月	4.70%	4.70%	4.80%
6/16	CPI(前月比)	5月	0.30%	0.60%	0.60%
6/23	マーケット英国製造業PMI(季調済)	6月	64.0	64.2	65.7
6/29	全国住宅価格(前月比)	6月	0.70%	0.70%	1.80%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7350 ~ 0.7770
AUD/JPY 82.30 ~ 85.80

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

6月の豪ドルは月前半は0.77ちょうどを中心として上下し、18日に0.74台へディップしたのち、月後半は0.75台を中心に推移した。第一週は豪1Q経常収支が予想を上回ったことで一時0.77後半まで上昇するも、RBA理事会にて2024年までの政策金利据え置きが示唆されたことで反落し、上昇分を消化。週後半は堅調な豪1QGDPで0.7774まで上昇したが、好調な米5月ADP雇用統計や米新規失業保険申請件数が発表されると週末米5月雇用統計への期待が高まり、米金利が上昇。それに伴い豪ドルは週安値の0.7646まで下落した。しかし実際発表された米5月雇用統計は市場予想を下回り、早期テーバリング期待が一服。急速にドル売りが進行し、豪ドルは0.77前半まで戻した。第二週は全般的に米5月CPI発表を前に手控え感があり、月曜から木曜にかけて50pipsのタイトレンジで終始した後、金曜は0.77台後半から大きく0.76台へ下落した。米5月CPIは予想を上回ったものの、ここの一週間のレンジ内(0.7650—0.7770)に留まった。市場の反応は、新型コロナ禍で大きく落ち込んでいた去年5月のCPIと比較をすると前年同期比の数字が堅調に見えるだけ、というベース効果によるゆがみが影響しているとの冷静な判断となった。第三週は豪RBA議事録要旨が発表され、「利上げの条件は早くても24年までは整う可能性低い。金融政策しばらくの間緩和的であり続ける必要がある。政策委メンバーはQE終了の検討は時期尚早と考えている。」等ハト派な内容が目立ち、発表後は0.77を割り、0.76台後半に下落。その後のFOMC会合ではタカ派な印象の見通しが発表され、米10年債利回り急上昇と追隨したドル買いを背景に0.7600近辺まで大きく下落した。17日に米10年債利回りが反転急降下し、株が下げるとリスク回避ムードの流れから豪ドルは更に0.7540まで下落し、18日はその流れを引き継いで0.7478まで下落した。第四週は鉄鉱石価格の下落などを背景に重く推移していたが、パウエルFRB議長の議会証言での発言がハト派だったことから、米国で利上げ前倒しの観測がやや後退し、米株が上昇。豪ドルは0.75半ばまで上昇した。週後半は米5月PCEコアデフレーターが前月比ベースで予想を下回り、過度なインフレ懸念が後退。米ドル売りの反応となり豪ドルは一時0.7616近辺まで上昇した。最終週は豪州各地で新型コロナ再拡大予防措置の2週間ロックダウンの厳戒態勢が敷かれた事が豪ドルの重しとなり再び0.75台後半で推移した。

■ 今月の見通し

7月の豪ドルは下に値幅が広がる展開を予想する。

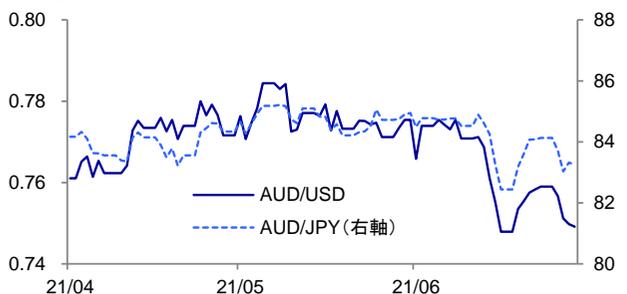
NSW州シドニーを初めとした豪州各地での2週間ロックダウンによる経済回復懸念が重しとなり、経済回復ベースの鈍化が懸念される。RBAの金融スタンスにも影響するとみられる。一方で米国FOMCでは前回のミーティングでタカ派に傾斜しており、米雇用統計結果と豪ロックダウンの行方によっては、二国の金融スタンスに乖離が出てくるとみられる。

7月6日開催予定のRBA会合でイールドカーブコントロール(YCC)の買い入れ対象となる3年国債を現行の2024年4月償還債から同年11月償還債に移行するか否か、又、さらなる量的緩和(QE)に動くかどうかについて発表が決定される。この結果で初回利上げ時期がいつになるかを占う事になる。RBAはこれまで豪州経済が想定以上に早いスピードで回復しているとの認識を示す一方、インフレ率が2~3%の目標レンジに「持続的に」収まるまでは利上げしない意向を表明しており、また現状ロックダウン中であるため、このタイミングでのタカ派コメントは出にくいと思われる。

今月発表予定の豪州国内の各ファンダメンタルズは堅調さを維持するとみられるが、ロックダウンが継続する中、豪ドルには重しとなる。

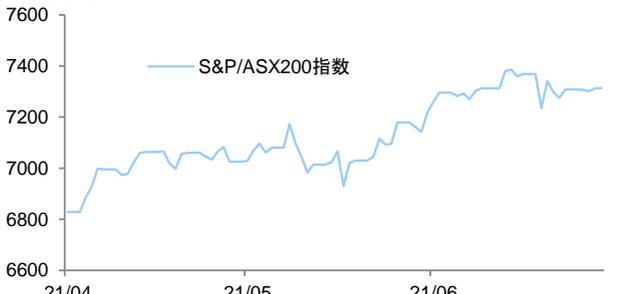
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	RBAキャシュレト	6月	0.1%	0.1%	0.1%
6/2	GDP(前年比)	1Q	0.6%	1.1%	-1.0%
6/3	貿易収支	4月	A\$8250m	A\$8028m	A\$5794m
6/3	小売売上高(前月比)	4月 F	1.1%	1.1%	1.1%
6/17	非常勤雇用者数変化	5月	-	17.7k	-64.2k
6/17	正規雇用者数変化	5月	-	97.5k	33.5k
6/17	雇用者数変化	5月	30.0k	115.2k	-30.7k
6/17	参加率	5月	66.1%	66.2%	65.9%
6/17	失業率	5月	5.5%	5.1%	5.5%
6/21	小売売上高(前月比)	5月 P	0.4%	0.1%	1.1%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2200 ~ 1.2600
CAD/JPY 88.00 ~ 91.00

米州資金部カナダ室 芦崎瑞穂

■ 先月の為替相場

6月は1.2030でオープン。月初からカナダ経済指標が示す良好な結果や原油価格の続伸を受けてカナダドル高での推移が続いたが、FOMCのスタンスがタカ派に転じたことを機に、USDドル買いが一気に進んだ。USD/CADは1.2487をトップにその後はUSDドル買いが一巡し値を戻すが、月末にかけてテーパリングへの期待によるUSDドル高基調が続いた。

1日カナダの2021年第4四半期(1~3月)の実質GDP成長率は住宅市場の伸びが牽引し、前期比年率5.6%と好調。3四半期連続で拡大した。OPECプラスの会合で決定された原油減産規模縮小が“段階的”であったことが好感され、また米国とイランの核合意に向けた話し合いが難航していることから、制裁解除によるイランの原油供給増加に対する懸念が遠のき、原油価格が上昇。エネルギーセクターの買いが進み、連日株価が高値を更新する中、カナダドルは1.2007まで上昇。4日のカナダ雇用統計では失業率が8.2%に上昇したが、新型コロナウイルス感染拡大第3波でのロックダウンによる経済指標の悪化は予想範囲内で市場の反応は限定的。一方で米新規失業保険申請件数、ISM非製造業指数等が予想を上回る強い結果となり、長期金利上昇と共にUSDドルが1.2130まで小反発。しかし、期待されていた米5月雇用統計では失業率が5.8%へと改善されたが、非農業部門就業者数が前月比から伸びが加速したものの、市場予想を下回り、軟調な結果を受けてUSD/CADは1.2071まで下落。9日カナダ中銀金融政策金利決定会合では経済回復への楽観的な見通しが好感され、カナダドル買い優勢が続きUSD/CADは1.2059をつけた後、1.20台後半から1.21台前半の狭いレンジで推移。10日米5月消費者物価指数上昇率は前月比0.6%で市場予想の0.4%を上回ったが、FRBの「インフレ圧力は一時的」とのスタンスを受け市場の反応は鈍かった。しかし米早期テーパリング観測が再燃しUSD/CADは1.21台後半へじりじりと上昇。注目された16日FOMCのドットチャートの予想中央値では、2023年末までに2回の利上げがあるとの見方が示された。タカ派姿勢へと転じたサプライズにUSDドルは1.2284まで急上昇。17日英国でワクチンを接種していない若者を中心に新型コロナウイルスの変異種デルタ株が再び蔓延しているとの報道や米イラン間接協議が合意に近づいたとの報道に原油価格が下落。カナダドルが1.2487まで売られる場面も見られた。その後パウエル議長の議会証言でハト派の姿勢が強調されUSD/CADは1.23台前半まで値を下げ、月末にかけては方向感のない狭いレンジでの値動きが続いた。

■ 今月の見通し

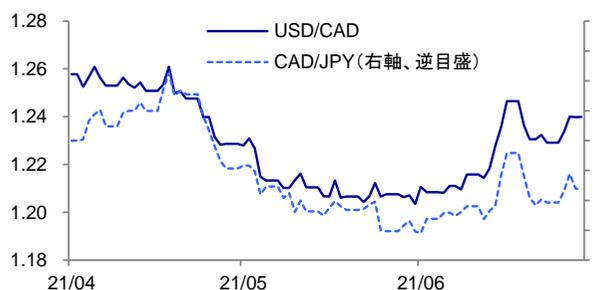
カナダは新型コロナウイルス感染拡大第3波に見舞われ、再びロックダウンを実施していたが、6月半ばより徐々に各州で制限規制が緩和され始めている。ワクチン接種率も上昇しており、1回目のワクチンを接種した人の割合は米国を抜き、カナダが世界最多を記録した。二回目の接種も急ピッチで進められており、新型コロナウイルス感染者の数は減少傾向にある。カナダ経済指標の結果も概ね好調。カナダ中銀金融政策決定会合では政策金利の据え置きが決定。量的緩和と低金利を2022年下半年まで維持するとの前回と変わらぬスタンスが示された。コロナ禍でのカナダ政府の経済支援策により家計の貯蓄率は2020年第4四半期の11.9%から当四半期は13.1%に上昇しており、経済正常化が進めば個人消費により国内経済が力強く回復するとの大きな期待がある。総合インフレ率については、夏にかけて目標の2%を上回る3%にとどまり、その後年内に鈍化する予想。また、コアインフレ率も一時的に上昇しているとの見方を示した。原油に関してはOPECプラス会合で5-7月に生産量を増やすことが決定され、次回7月1日の会合では8月以降も更なる増産があるかが話し合いの焦点となる。またイランと米国の核合意交渉の行方も懸念材料の一つだ。イラン大統領選では、反米で保守強硬派のライシ師が当選。米国との核合意交渉は継続するとの報道があったものの、その後10日間の協議中止が決定されており、交渉の先行きが不透明。合意に至れば米国のイランへの制裁が解除となり原油増産となる。それでも暫く夏のドライブシーズンに向けて原油需要は強く、市場でも価格の更なる上昇が予想されておりカナダドルの堅調推移をサポートすると思われる。14日カナダ中銀金融政策決定会合が開かれる。経済活動が開始されワクチン接種率が上昇している中、経済回復への更なる強気姿勢が示されると推測。また27-28日にはFOMCが開かれる。市場予想では、FRBが量的緩和縮小を表明するのは8月ジャクソンホール会合まで持ち越されるだろうとの見方が強い。今月の会合では混乱を避けるため、慎重な発言が予想される。今月も引き続き経済指標、要人発言、新型コロナウイルス・デルタ株感染状況や原油市場に注目。米国経済指標が示す好調な結果やテーパリングの期待による米長期金利上昇でのUSDドル高圧力が強いものの、FOMCの市場の混乱を回避する牽制姿勢、USDドル過剰感や原油高などカナダドル買いの材料も揃っていることなどからUSDドル上昇は限定的になると推測。7月は1.22-1.26のレンジを予想。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のワクチン接種事情』
カナダでは12歳以上を対象にワクチン接種が進められており、人口のおよそ75%が1回目の接種を終えています。しかし、自国でワクチンを製造できず、輸入に頼らなければならないことから、2回目の接種を終えた人の割合は30%程です。接種対象者は高齢者、医療従事者などの感染リスクが高い人たちや先住民が優先され、続いて年齢の高い人から順に接種が受けられます。ワクチンの種類はファイザー、モデルナ、アストラゼネカが主流でしたが、アストラゼネカは稀に副作用があるとの懸念や、免疫力が他と比べると低いとの理由で、ファイザーかモデルナを受けるよう推奨されています。カナダのワクチン接種率急上昇の根底には国民のカナダ医療制度、政府への強い信頼感があり、また米国でスピーディーなワクチン接種が行われ、感染者数が減少し通常の生活が戻りつつあるとの報道に強く感化されたと思われる。ワクチン接種場所は多数設置されており、ドラッグストア、市民センター、スーパーマーケットの中に設置されている小さな薬局でも、ワクチンを受けられます。予約なしでも気軽に立ち寄れるpop-up clinics(一時的な仮施設)もあり便利です。また、6/27に大規模なワクチンイベントがトロントにある屋内競技場のスコシアバンク・アリーナ(Scotiabank Arena)で開催されました。北米の1日の接種回数最多記録はテキサスの17,000人。その記録を更新しようとする人たちの熱意もあり、参加者は26,771人になり、北米新記録を達成しました。イベント参加者には会場に着くまでに利用した公共交通機関の運賃を無料にするサービスが提供されるなど、接種者増加に向けてあれこれ手がつくされています。当地ではロックダウンとワクチン接種で感染者は目に見えて減少しておりますが、世界でデルタ株が増加傾向にありまだ予断が許されない状況です。

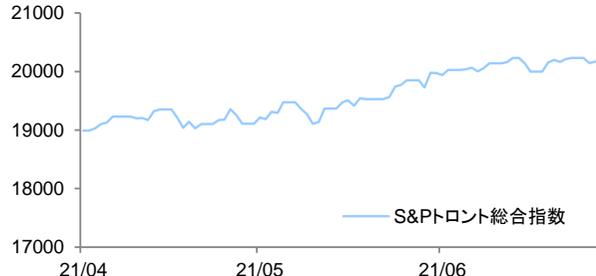
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	GDP(前月比)	3月	1.0%	1.1%	0.4%
6/1	マークイットカナダ製造業PMI	5月	-	57.0	57.2
6/4	ネット雇用者数変化	5月	-25.0k	-68.0k	-207.1k
6/4	失業率	5月	8.2%	8.2%	8.1%
6/8	貿易収支	4月	-0.80b	0.59b	-1.35b
6/9	カナダ中銀政策金利決定会合		25.0%	0.25%	0.25%
6/14	製造業売上高(前月比)	4月	-1.1%	-2.1%	4.0%
6/16	CPI(前年比)	5月	3.5%	3.6%	3.4%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1110	~	1150	(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.615	~	10.101	
	JPY/KRW	9.900	~	10.400	

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

6月のドル/ウォン相場は上昇した。1日には人民元を除く主要市場でドル売りとなる中、ドル/ウォンは月安値1,105.0まで下落した。しかし、2日に中国当局が外貨預金の準備率を引き上げた(5%→7%)ことに加え、最近の人民元高に対する投機的な動きに警告を発したことで人民元安が進んだほか、3日海外時間で発表された米単位人件費が前期比+1.7%と大きく上昇したことインフレ圧力が大きく意識され、4日には1,119.1ウォンまで上昇した。しかし、4日の米雇用統計(実績:55.9万人、予想:67.5万人)が予想比軟調な結果だったことを受けドル売りととなり、7日のドル/ウォンは1,111.2でオープン。その後材料に乏しい中、ドル/ウォンは小幅な値動きとなった。10日の米CPIは市場予想以上に強い結果となるも、航空運賃等のコロナ禍からの回復要因が大きかったことを受け、インフレは一時的との見方が広がった。さらに韓国中銀総裁が、景気回復が実現すれば金融正常化を進めるとの発言したこと韓国国債金利が上昇する中ドル/ウォンは一時1,111台まで反落するも、再び上昇し14日のドル/ウォンは1,116.3でオープン。この週は16日FOMCを前に目立った材料なくドル/ウォンは1,110台後半でほとんど動きのない展開。FOMCではFF金利を据え置いたものの、声明文ではワクチン普及によりコロナ禍による景気への影響は減りつつあるとし、前回(4月)より景気回復の進展を示唆。さらにFF金利の見通しを示すドットチャートでは、2023年末までに2回以上の利上げを見込んでいる参加者が19人中6人(前は2人)ことが示された。これを受け、市場参加者は予想を上回るペースで利上げが進む可能性を意識し米2、3年債利回りは急上昇し、ドル/ウォンも1か月ぶりとなる1,130台まで上昇した。21日のドル/ウォンは1,135.5でオープンし、米国の早期利上げを懸念した米2年債利回りが急上昇する一方で、米10年債利回りが一時1.36%台まで下落する等フラットニングが進行する中、新興国通貨全般が売られドル/ウォンも月高値1,138.8ウォンまで上昇した。しかしそこでは水準感から実需のウォン買いが入り22日にはドル/ウォンも1,131.1まで下落した。さらに、数日にわたってパウエルFRB議長およびNY連銀総裁を始め複数のFRB高官が、インフレ上昇は一時的であり雇用の最大化には時間がかかる旨の発言を行ったことで市場全体が落ち着いた相場となった。24日海外時間にはバイデン政権と上院超党派が1兆ドル規模のインフラ投資法案を合意したことや、実需のウォン買い等を受けドル/ウォンは1,126.8まで下落。最終週は実需のウォン買いが入りつつも全体として方向感に乏しく、結局、前月末比15.2ウォン上昇した、1,126.1ウォンでクローズ。

■ 今月の見通し

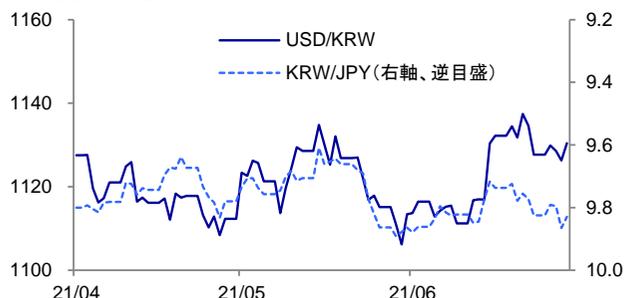
7月のドル/ウォン相場は方向感に乏しい展開を予想する。6月はFEDがFF金利の見通しを示すドットチャートを上方修正したことで、ドル買いが進んだ。ドル/ウォンが上昇した。一方で、韓国中銀も韓国での景気回復や今後の金融政策への余裕を持たせるために、年内での利上げ(韓国中銀曰く、正常化)を示唆しているものの、FEDの利上げ期待の影響が大きいことから、ドル/ウォン相場への影響は限定的なものにとどまっている印象だ。今月のドル/ウォンの注目材料は以下の3つ。
 ①7月FOMCでのFEDの金融政策変更②新型コロナウイルスのデルタ変異株による影響③韓国中銀による利上げ時期の示唆
 ①6月FOMCにてワクチン普及を受けた米景気回復を相応に織り込んでいることから、市場では7月のFOMCで更なる金融政策正常化のシグナルは限定的と予想されている。しかしながら、利上げタイミング(現時点では初回が2022年後半-23年前半)について、ヒント(インフレや雇用の目安等)を出す可能性もあり、引き続き注目イベントとなろう。2021年初はコロナ禍からの回復をテーマに米10年債利回りが注目されていたものの、足もたては利上げタイミングを巡り、米2、3年債金利が大きく動く相場となっている。一般に、短い期間の金利が大きく動く金融市場全般が不安定になりやすく、ドル買いになりやすいことから、ドル/ウォンの買い材料になる可能性には留意したい。
 ②新型コロナウイルスのデルタ変異株が英国、豪州等のワクチン普及が進んでいる国で感染を広げつつある。現在は、モデルナ社のワクチンはデルタ変異株にも効果があるほか、感染したとしてもワクチン接種者は重症化しにくい等の報道もあり大きな問題にはなっていないものの、一時的なリスクオフ材料になる可能性はなり得よう。
 ③韓国中銀による利上げ時期は早ければ8月と予想されており、7月の会合で何らかのメッセージを出す可能性はあろう。今まではドル/ウォンへの影響は限定的にとどまっているものの、今後はドル/ウォンが反応するリスクもあり注視してまいりたい。
 かかる状況下、7月のドル/ウォンの上昇は一旦小休止になると予想する。
 ①、②はドル買いの有力な材料ではあるものの、現状米2年債利回りはFEDの利上げを十分織り込んでいる。デルタ変異株の感染が拡大する中、7月にFEDがさらに踏み込んだ金融正常化を示すとは考えにくく、一旦ドル買いの速度は落ちよう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のワクチン接種事情』
 韓国のワクチン事情ですが、割と日本に近いのではないのでしょうか。現在の韓国の接種率は約30%(6/26日時点)に対し、日本が20%を超えたくらいですから、やや韓国がリードしている印象ですが、接種の対象は現在も高齢者がメインであり、私も含めた一般人に回ってくるにはもう少し時間がかかる印象です。韓国では主なワクチンはアストラゼネカ製であり、2回接種が必要なことも日本と同じとなっております。ワクチン接種自体は近所の病院の他、保健所でも行っておりますが、それらはカカオやネイバーといったスマホアプリを通じて、どこに何回分のワクチンが残っているか可視化されており、残余ワクチンはアプリを通じて予約できるあたりはIT大国韓国ならではのかもしれません。私も早くワクチンが打ちたくて、時々アプリを覗いてみるのですが、いつも残余ワクチンは「ゼロ」、「ゼロ」、「ゼロ」のオンパレードとなっており、中々接種できない状況でした。そんな中、同じチームの韓国人スタッフにどうやったら残余ワクチンを手に入れられるのか聞いたところ、保健所や病院に事前に電話して、余ったらアプリに登録する前に回してもらえようように交渉するとのこと。。。うーん、どんな世の中も、個別交渉が一番早いんですねと思ったものの、さすがにワクチンの交渉ができるほど韓国語が話せない私がワクチンを手に入れられるのはもう少し先のようです。皆様も日本でワクチンが普及し、海外旅行ができるようになったら韓国に遊びに来てください。

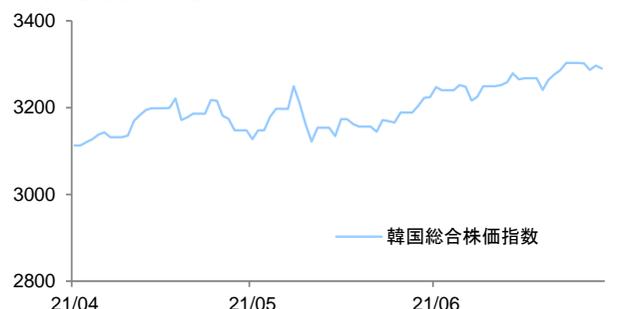
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	輸入(前年比)	5月	38.0%	37.9%	33.9%
6/1	輸出(前年比)	5月	48.9%	45.6%	40.9%
6/1	貿易収支	5月	\$3,751	\$2,925m	\$442m
6/2	CPI(前年比)	5月	2.6%	2.6%	2.3%
6/9	失業率	5月	3.6%	3.8%	3.7%
6/9	GDP(前期比)	1Q	1.6%	1.7%	1.6%
6/24	消費者信頼感	6月	-	110.3	102.2
6/25	景況判断(製造業)	7月	-	99	97
6/25	景況判断(非製造業)	7月	-	82	81
6/30	鉱工業生産(前年比)	5月	18.3%	15.6%	12.6%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 27.60 ~ 28.10
TWD/JPY 3.90 ~ 4.05

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

6月のドル/台湾ドルは、約24年ぶりの台湾ドル高水準を更新するも買い戻される展開に。

月初のドル/台湾ドルは、27.610でオープン後、前月末からの輸出企業のドル売りが優勢で台湾ドル高の流れが継続。一時27.502まで下落し、約24年ぶりの台湾ドル高水準を更新。台湾ドル買いが一服すると27.60台に戻したが、人民元等アジア通貨が対ドルで下落したことや、輸入企業のドル買いも入り、27.70台に上昇した。その後、月前半は域内の新型コロナウイルスの感染者が減らない中、台湾株は伸び悩み、外国人投資家も株を売り越しており、下値は堅く27.70付近で推移した。

月央では、台湾株がじりじりと上昇したこと、台湾ドルが買われ、6/11には一時27.60を割る場面も見られた。しかし、FOMCを前に調整の動きからドルが買い戻され、外資や生保等のドル買いも入ると27.70近くまで上昇。なお、6/17にはFOMCの結果を受け米金利が上昇すると、一時27.790をつけたものの、すぐに27.70付近に戻された。ただし、その後は米金利の短中期ゾーンが上昇したことを受け、外国人投資家の台湾ドル売りが入り、ドル/台湾ドルはじりじりと上昇し、27.80台に。

月後半に入ると、6/21には米国の早期金融緩和縮小懸念からアジア株が急落する中、台湾株も売られ、ドル/台湾ドルは28.00付近まで上昇。外国人投資家の台湾株の売り越し額は大きく、台湾ドル売り圧力となり、6/23には約一か月ぶりに28台にのせ、一時28.026をつけた。その後は28.00付近で推移したが、外国人投資家の台湾ドル売りが落ち着くと、四半期末を控え輸出企業のドル売りが優勢となり一旦27.850まで下落する場面がみられたが、外国人投資家の動きが活発になると27.90付近で推移。しかし、月末の6/30には輸出企業のドル売りに加え、台湾加権指数が最高値を更新する中、外国人投資家の台湾ドル買いも入り、一時27.822まで下落した。

■ 今月の見通し

7月のドル/台湾ドルはレンジでの推移を見込む。

昨年からの台湾ドル高の要因となった輸出企業については相変わらず好調である。5月の輸出額は前年同月比28.6%増、輸出受注額も前年同月比34.5%増と勢いに衰えを見せておらず、台湾ドル高の材料であることには変わらない。しかし、6月については、FOMCからの米国の早期利上げ時期の前倒し観測が高まり、短中期ゾーンを中心に米金利が上がったことから、台湾では外国人投資家の動きが活発となり、資金が国外に流れる過程で台湾ドル高が抑制された。

7月については、上述の通り、輸出企業のドル売り圧力は強いものの、米国の金利動向に左右される展開となるであろう。6月だけでなく、3月も米長期金利が上昇した際には、外国人投資家の海外への送金が国内の好調な輸出企業のドル売りに勝り、台湾ドル高を食い止める要因となった。さらに海外金利の上昇は生保等の国内投資家の外国投資への意欲も高め、台湾ドル売り材料となる。今後も米経済指標の結果に左右される米金利につられ、ドル/台湾ドルもレンジで推移するであろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のワクチン接種事情』

当地では新型コロナウイルスの域内での感染の抑え込みに当初成功したこともあり、ワクチンの接種はあまり進んでいませんでした。2021年4月ごろにはワクチンを受けたい人も少なく、余っていたため、自費であれば予約して受けることも可能でした。

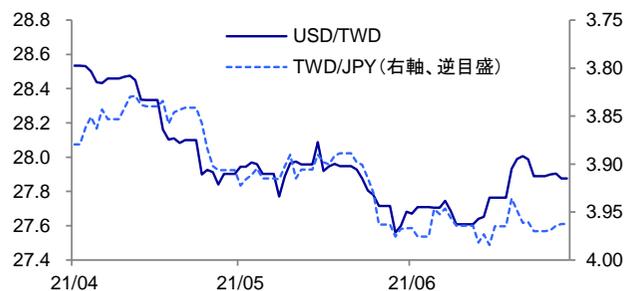
しかし、2021年5月に入り、域内での感染が広まったため、急速にワクチンへの需要が高まりました。ただし、感染を抑え込めていたり、色々な事情からワクチンの調達も進んでいなかったため、急いで政府が調達を進めている次第です。また、計画では必要なワクチンの半分を台湾製で賄うことになっていますが、まだ承認もされておらず、台湾製ワクチンに疑問の声も聞かれます。そんな中、日本からサブプライズで無償提供されたワクチンに対しては、台湾からは感謝の気持ちが示されています。少しずつワクチンの在庫も増え、日本と同様に高齢者や医療従事者等が優先的にワクチンを受けている状況です。

ただし、働き盛りの年代が接種できるのがいつになるのかは不明です。派遣員の一時帰国による日本での接種の話も出ていますが、再入国時の隔離が一層厳しくなる中、台湾国内での早期ワクチン接種に期待をしています。

なお、台湾の大手企業が政府とは別に直接製薬会社からワクチンの調達を試みてもいるので、ひょっとすると早く摂取できるかもしれません。

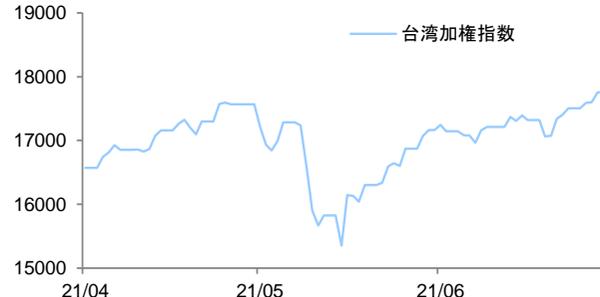
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/4	外貨準備高	5月	-	542.98B	541.11B
6/4	GDP改定値	1Q	8.20%	8.92%	8.16%
6/8	CPI(前年比)	5月	2.20%	2.48%	2.10%
6/8	輸出(前年比)	5月	30.5%	38.6%	38.7%
6/8	輸入(前年比)	5月	29.8%	40.9%	26.4%
6/8	貿易収支	5月	6.40B	6.16B	6.18B
6/17	公定歩合	2Q	1.125%	1.125%	1.125%
6/21	輸出受注(前年比)	5月	42.1%	34.5%	42.6%
6/23	鉱工業生産(前年比)	5月	13.05%	16.51%	14.10%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7550 ~ 7.7800
HKD/JPY 14.00 ~ 14.45

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【6月の香港ドル直物相場】

6月の香港ドル直物相場は、6月第一週に3か月ぶり高値である7.7560をつけた後反転下落し、7.76台で推移した。米国連邦準備理事会（FRB）のタカ派姿勢が香港ドルの売り圧力を強める一方、IPO関連需要や中国企業の配当金支払いに伴う香港ドル買い圧力が相場を支えた。FRBのタカ派シフトを受けて米ドル金利は上昇したが、米ドルと香港ドルの金利差は引き続きゼロ近辺に留まった。ストックコネク（中国本土市場との株式相互取引制度）を通じた香港株式市場への資金流入は堅調に推移しており、年初来で4,600億香港ドルと高水準を維持している。上半期のIPO活動は引き続き活発だったが、香港ドル直物相手を7.75台まで押し上げるほどの強力な上昇圧力はなかった。マクロ経済に目を向けると、中国本土との往来が再開されていない中で香港の消費活動は緩やかなものとなっており、5月のCPI（消費者物価指数）は前年比で1.0%増に留まっている。一方で労働市場は急速に回復してきており、5月の失業率は前月対比で0.4ポイント低下し、6.0%となった。

【6月の香港ドル金利市場】

6月中旬のFRBのタカ派シフトを受けた米ドル金利の上昇に追随し、香港ドルの短期金利も上昇する動きとなった。香港ドルHIBORは1か月物で0.09%、3か月物で0.17%とそれぞれ上昇し、香港ドルと米ドルの金利差はほぼゼロ近辺での推移となった。香港ドルの流動性状況は引き続き潤沢で、香港金融管理局（HKMA）のアグリゲートバランスは過去最高水準の4,575億香港ドルを維持している。市場参加者がFRBの利上げ開始時期の予想を前倒しにしている中、米ドルベッグ制の下、香港ドル金利にも早期利上げ観測に伴う上昇圧力がかり始めた。特に5月末には、香港ドル3年スワップレートが0.39%から0.52%まで上昇した。さらに、香港ドル金利上昇リスクに対するヘッジニーズも高まったことから、香港ドル長短金利差（3か月物HIBOR－3年物スワップレート）は-0.22%から-0.35%までマイナス幅を拡大させた。

■ 今月の見通し

【7月の香港ドル直物相場】

7月の香港ドル直物相場は、7.755から7.780レンジ内での推移を想定する。FRBのタカ派シフトは、米国の利上げサイクルが想定以上に早まる可能性を示唆しており、米ドル短期金利の上昇を通じて、対米ドルでの香港ドル下落に拍車をかける可能性がある。さらに、7月のFOMC会合において、FRBがタカ派スタンスを更に強めることも考えられる。一方で香港ドル金利は、半期末越え資金需要の期落ちから、低下圧力が想定されている。加えて、テーパードラムの懸念が再燃した場合、FRBが想定よりも早期に米ドルの流動性を吸収するとの恐れから、香港ドルを含むアジア新興国通貨に下押し圧力がかかる。ストックコネクを通じた香港株式市場への資金流入は、今年の夏は足元の水準からあまり変わらないと予想されるものの、本土企業による配当金支払いと活発化する電気自動車（EV）企業のIPOに伴う資金需要が香港ドル直物相場の一定の下支えとはなるだろう。

【7月の香港ドル金利市場】

7月の香港ドル金利は、短期金利については概ねレンジ内で推移するも、主に中長期の部分で米ドル金利に追随して上昇する展開を予想する。6月のFOMC会合におけるFRBのタカ派シフトは、米ドル及び米金利の下落トレンドを転換させた。米ドル金利は底を打ち、テーパリングに関する議論が進む中で一段と上昇が予想される。市場参加者は、FRBがインフレリスクを警戒して利上げサイクルを早めるとの期待を徐々に織り込んでいる。織り込みが一段と進むにつれ、スワップ金利等、中長期については、香港ドル金利も更なる上昇圧力を受けることになるだろう。一方で香港ドルの流動性状況は、HKMAのアグリゲートバランスの残高が過去最高水準を維持しており、潤沢な状態が続くとみられる。下半期にも活発なIPO活動が予定されていることを考慮すると、HKMAが為替基金証券（EFBNs）の発行を通じた香港ドルの吸収に動くとは想定しにくい。短期の香港ドル金利への上昇圧力は限定的となるだろう。

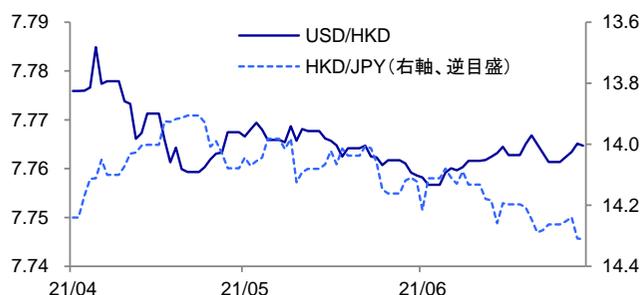
■ 今月のつづやき（現地からの声）

『香港のワクチン接種事情』

香港におけるワクチン接種の進捗具合は非常に遅く、二回目の接種まで終えた人の割合は全人口の20%以下に留まっています。厳しいソーシャルディスタンス規制等によりウイルスの感染拡大は抑えられており、香港内で生活する限りはワクチン接種の必要性を強くは感じにくい状況です。香港の企業の中には、ワクチン接種の意欲を高める為、接種した人々を対象にした抽選会の開催や各種プロモーション活動を行っているところもあります。とりわけ目を引く抽選品は、約1億5千万円相当のマシソンです。今後、ワクチン接種の進捗次第ではソーシャルディスタンス規制の緩和や国境を越えた往來の再開が期待でき、夏には接種率も上昇していくと予想されています。

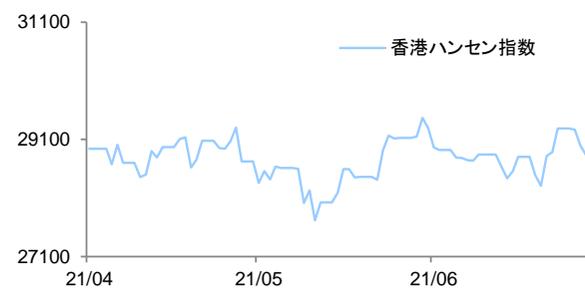
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	小売売上高（価額、前年比）	4月	17.0%	12.1%	20.1%
6/3	日経香港PMI	5月	-	52.5	50.3
6/7	外貨準備高	5月	-	\$494.5b	490.6b
6/15	鉱工業生産（前年比）	1Q	-	2.6%	-6.1%
6/15	PPI（前年比）	1Q	-	1.7%	2.9%
6/17	失業率（季調済）	5月	6.2%	6.0%	6.4%
6/22	CPIコア（前年比）	5月	1.1%	1.0%	0.7%
6/28	輸出（前年比）	5月	23.6%	24.0%	24.4%
6/28	輸入（前年比）	5月	27.4%	26.5%	25.2%
6/28	貿易収支（HKD）	5月	-30.2b	-25.5b	-31.8b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.3500 ~ 6.6500
 CNY/JPY 16.39 ~ 17.95
 100JPY/CNY 5.5700 ~ 6.1000

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

6月のドル人民元為替相場(USDCNY)は上昇。

5月31日、USDCNYは年初来最安値を更新し6.3565をつける。直後、「外貨預金準備率引き上げ」の報道を受けこれまでの元高の流れは一変、6.37台前半まで反転上昇。以降も上昇が続き、1日には6.38台へ、3日には好調な米国経済指標の結果を受けたドル買いの流れも加わり6.40台を回復した。4日夜、米雇用統計の予想対比弱い結果を受けて6.41レベルから6.39台へ下落。

7日6.39台後半で取引を開始した直後、ドル買いが入り6.40台まで上昇も、夕方に入ると元高が進み6.39台へ。7日の貿易収支や9日のCPI等、国内経済指標には大きく反応せず6.39を挟んで方向感に欠ける値動きの中、1日の高値を6.40台前半から6.39台前半に徐々に切り下げる展開。11日には6.38台を推移。

15日、6.40近辺で取引を開始。16日に発表された中国5月主要経済指標は総じて事前予想を下回ったが、FOMCを前に反応は限定的。FOMCではドットチャート中央値が2023年で0.125%から0.625%へ引き上げ(2回の利上げ示唆)、2022年も1回以上の利上げを想定する参加者が増加。また、超過準備預金金利(IOER)、翌日物利バースレボ金利(RRP)も各5bps引き上げられた。市場予想を上回るタカ派な内容に米金利は上昇し、ドル全面高となったことでオフショアUSDCNHは6.44台へ上昇。17日のUSDCNYが6.42台へギャップオープンした後は、FOMC結果を消化しながら底堅い推移となり、18日には6.45近辺まで水準を回復。

21日、6.45台前半で取引を開始。タカ派なFOMCの結果を受けたドル高は続き、午前中に6.47付近まで上昇。同日発表されたLPRは14か月連続の据置き(1年物:3.85%、5年物:4.65%)であり、市場への影響は限定的となった。ドル高の流れは23日まで続き、一時6.49レベルへ上昇し、4月28日以来の水準をつけたが、その後は一転しドル安の流れ。前日、パウエル議長の議会証言でインフレは一時的と強調していたこともドル売りの材料となり下落した。

■ 今月の見通し

7月のUSDCNYは上値の重い展開を予想。

中国人民銀行の外貨預金準備率引き上げに続けて、中国国家外為管理局の適格国内機関投資家制度の対外証券投資枠の拡大、中国政策銀行の6年ぶりとなる中国本土でのドル調達実施は、いずれも元高の急激な進行を食い止めるためのメッセージと受け止められたことから6月の相場は元安方向に戻ることとなった。

タカ派なFOMCもドル高元安の流れをサポートすることとなったものの、パウエル議長の議会証言を受けて元安の流れは小休止。

米国の経済指標が良好であった場合はドル高推移する可能性があるものの、経済回復が一時的なものかどうかの見極めも必要なためUSDCNYの上昇は一時的となると予想する。7月以降のFOMCや8月のジャクソンホールに加え、新型コロナウイルスワクチン接種進捗状況、バイデン大統領による経済対策を好感する動きも米金利上昇やドル高の要因となるため注意したい。

一方で、中国株式や債券への資本流入は顕著なペースで続いており、元高の大きな要因となっている。

5月の主要統計は事前予想を下回り、回復ペースはやや緩慢となったものの、他国と比較して経済活動が堅調であることには変わらず、元高をサポート。米国の金融正常化に対する期待でドル高進行はあり得るものの、中国経済の強さに起因する長期的な元高見通しは保持したい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のワクチン接種事情』

中国本土のワクチン接種累計回数は12億回を超えています。多い日は1日2000万回のペースで進んでおり、その規模には驚かされます。

上海では、ショッピングモール近くのような、人が多く集まる場所で接種会場が設置されているのをよく見かけます。人が並んでおり、時々防護服を着た人も見かけます。

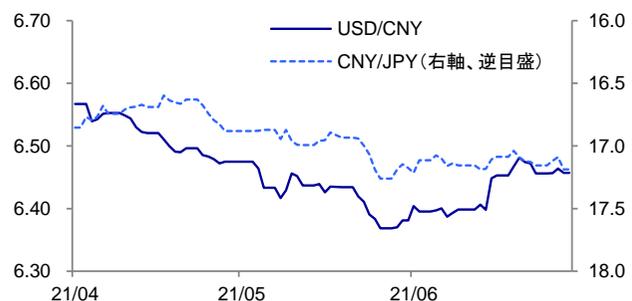
接種予約はWeChatというSNS内のアプリを使うことで簡単にできます。その場で予約して接種することができたので30分くらいで終わった、という現地の方の話も聞いたことがあります。

上海では「随申碼」というコロナ感染疑いの有り無しが管理されるアプリがあるのですが(日本の接触確認アプリのイメージです)、ワクチン接種を行うとその情報が即時反映されるようです。

このように、制度も普及も進んでいるワクチン接種ですが、大規模接種が一通り終わってきたことから、上海の接種会場を来月から一部閉鎖するとの報道がある一方で、接種を終えた市民にはドイツニーランドの入場券を贈呈するとの動きもみられています。接種率の高止まりが今後の課題となってくるのは中国も同様なのかもしれない。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/31	製造業PMI	5月	51.1	51.0	51.1
5/31	非製造業PMI	5月	55.1	55.2	54.9
6/1	財新・製造業PMI	5月	52.0	52.0	51.9
6/3	財新・サービス業PMI	5月	56.2	55.1	56.3
6/7	貿易収支(年初来)	5月	\$50.7b	\$45.5b	\$42.9b
6/9	PPI(前年比)	5月	8.5%	9.0%	6.8%
6/9	CPI(前年比)	5月	1.6%	1.3%	0.9%
6/16	鉱工業生産(年初来/前年比)	5月	18.0%	17.8%	20.3%
6/16	小売売上高(年初来/前年比)	5月	26.3%	25.7%	29.6%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3200 ~ 1.3500
SGD/JPY 81.00 ~ 83.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2021年6月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD安が進行。

月初よりSGDは軟調に推移。5月の米雇用統計への期待感からUSD高が進行するなか、月初1.32レベルで推移していたUSD/SGDは4日にかけて1.33台半ばの水準までSGD安が進行。その後、実際に発表された米5月雇用統計が市場予想から下振れ、FRBの早期金融引き締め観測が後退。米金利低下に伴いSGDは一転上昇し、USD/SGDは1.32台前半へと水準を戻す。

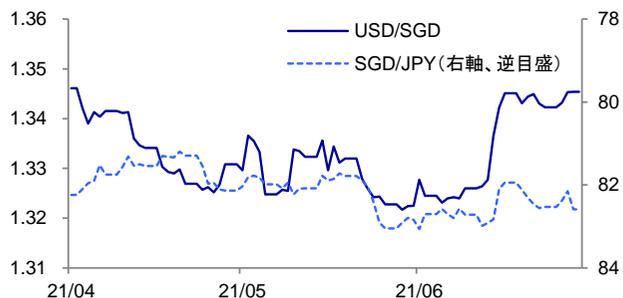
その後は月半ばにかけてSGDはじり安に推移。雇用統計消化後は手掛かり材料に乏しく、明確なトレンドが形成されないまま、USD/SGDは1.32台前半での狭いレンジ内推移となった。

17日、前日まで開催されていた米FOMCにて、メンバーによる政策金利見通しが上方修正される等のタカ派サプライズを受けて米金利が上昇。USDが全面高となる中、大半の新興国通貨が下落。USD/SGDについても大きく水準を変え、1.32台で推移していたUSD/SGDは1.33台後半の水準までSGD安が進行した。

その後もUSDが一段高となる中、SGDは軟調に推移。21日にかけてUSD/SGDは1.34台後半の水準に達し月中高値を更新。USD高一服後も新興国通貨は全体的に上値の重い展開。パウエルFRB議長証言においても米国のスタンスに大幅な変更はないとの見方から、新興国各国それぞれに強弱材料はあるが、USD高トレンドに大きな変化は生じず。USD/SGDは結局、1.34台前半での推移が継続している(29日現在)。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

2021年7月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD高の進行を予想。

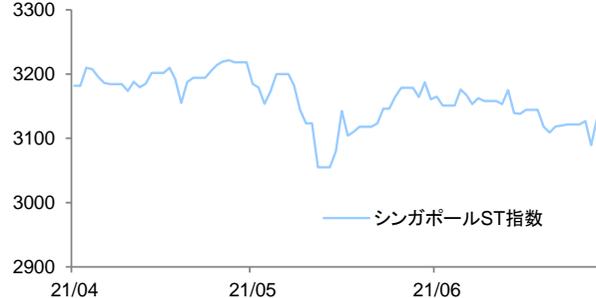
6月のFOMCにおけるタカ派サプライズを受けてSGDは水準を切り下げたが、既にNEERバンドの上限近くで推移していたSGDにとってみれば、ここものとSGD上昇に若干の修正が行われた程度の影響に留まっており、中長期予想においては、SGDはUSDに対し小幅に上昇していくとのシナリオを維持したい(弊社モデルによればSGDは既にNEER中央値から約140、150bp高い水準で推移(上限200bp)で推移していたが、FOMC後には50bpほどその水準を切り下げた)。

足元のSGDの動きは引き続き米金利並びにUSD動向に左右されようが、シンガポールは比較的早期に新型コロナウイルスワクチンが普及しており集団免疫獲得も近いとの見方もあり、周辺諸国通貨対比で安全通貨としての地位を確立しつつある。SGDは今後、米国のテーパリングに向けたヒントが発せられるにつれ一時的に1.39台まで安くなる可能性はありながらも、周辺諸国の経済回復やMASのスタンス変更に伴い、結局は1.30~1.33台での推移に落ち着くものと予想する。

なお、我々の予想の骨子は基本的に「米国のテーパリングスタンス維持」及び「PBoCがCNYのNEER安定を促進すること」が前提であり、米国がテーパリングに向けたヒントを発し続けようとも、人民元は相対的に安定推移を継続。結果的に、SGDバスケット通貨内で高い比率を占めると考えられるUSDや人民元の上昇につれ、SGDの推移も安定するというシナリオが前提となっている。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の在外人のワクチン接種事情』

シンガポールでは昨年末に国内でのワクチン接種が始まって以降、1月早々に首相が自ら予防接種を受ける様子を発信する等、ワクチン接種が強く推進されています。首相の接種を担当した医療関係者の緊張はなかなかのものだったのではないかと推察しますが、首相のアピールの効果もあってか接種の進捗は順調なようです。接種の順序については他の地域と同様なのではないかと思いますが、医療従事者や高齢者から優先的に接種を行い、徐々に対象年齢を広げていくスタイルで運用されており、6月末時点で39歳以下にまで対象年齢が下がってきています。(但し、39歳以下に接種対象が広がってから当初2週間程度はシンガポール国民が優先して予約を取れる期間として割り当てられており、39歳以下の在外人は7月初旬からの接種開始を待っている状況)。ちなみに、40歳以上まで対象者が拡大した後、次は39歳以下か、と期待をしたのですが12歳以上のローカルスクールの学生が優先されていました。スクールホリデーと重なった事情もあったと思いますが、シンガポールの教育に対する強い思いを垣間見た気がします。接種までの流れは、接種希望者が専用サイトで予防接種希望の意思を表明し、予約可能になったタイミングでSMSで通知を受領。各自が接種日程予約(ファイザーorモデルナの希望に応じて会場を選択)となっています。接種が進み集団免疫が獲得できれば国境をまたいだ移動の制限が緩和されていくことも想定される、といったコメントも出ていましたが、まずは予防接種を終え、いつか来るその日を楽しみに待ちたいと思います。

(アジア・オセアニア資金部 吉田朋哉)

■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/2	購買部景気指数	5月	51.0	50.7	50.9
6/4	小売売上高(前年比)	4月	58.6%	54.0%	6.3%
6/17	非石油地場輸出(前年比)	5月	16.0%	8.8%	6.0%
6/23	CPI(前年比)	5月	2.2%	2.4%	2.1%
6/25	鉱工業生産(前年比)	5月	24.1%	30.0%	2.3%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 31.30 ~ 32.50
THB/JPY 3.41 ~ 3.53

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 橋 雄史

■ 先月の為替相場

6月のドルバーツは年初来高値を更新。月初のドルバーツは31.20近辺でオープン。前月からのドル安バーツ高の流れを引継ぎ、じり安基調で推移するが、3日には米経済指標が良好となったことで反発。4日はタイ5月CPIが発表され、前年同月対比で+2.44%上昇の結果を示したものの4月からは伸びが鈍化となった。翌週はFOMC前のブラックアウト期間に入ったこともあり、7日から10日にかけては31台前半でのレンジ推移が継続するが、11日にはバンコック時間終盤にかけてドル売りが継続し、約1ヶ月ぶりの水準となる31.05近辺まで下落。

週明け14日はFOMC前かつ中国市場が休場に当たることもあり、動意にかける展開となり、中国の原子力発電所で放射能漏れとのニュースを受け、オプショア人民元は売りが優勢となったもののタイバーツへの影響は限定的で、ドルバーツは31.10近辺で横ばい推移。15日はタイのプラユット首相から、タイは10月にもワクチン接種者を条件に隔離免除の入国を認める方針が示されたが、バーツ相場への反応は限定的となった。16日、注目されたFOMCでは予想外にタカ派スタンスが強まる展開。事前予想に反しドットチャートが大きく上方シフトし、米金利が上昇したことからドル買いが加速。ドルバーツも31.35手前まで上昇した。

17日以降はドルバーツは一本調子で上昇。FOMC後のドル高地合いが強まる中、18日にはハト派で知られるセントルイス地区連銀のブラード総裁が2022年終盤に利上げをすべきとの見解を示すと、一段とドル高が進行。翌週もドル高基調は止まらず、21日には月間高値を更新。24日にはタイ中銀の金融政策委員会(MPC)を迎えたが、政策金利は全会一致で0.50%に据え置かれた。2021年のタイGDP見通しが1.8%へ下方修正されたこともあり、バーツは売り地合いが継続する中、一時31.90近辺まで上昇。月末にかけても、ドルバーツの上昇地合いは収まらず、公立・私立病院のコロナ病床が満床状態となり、医療崩壊も意識される中でバーツ安が継続。26日にはバンコックを含む周辺5県での行動制限厳格化が発表されたこともあり、29日には節目の32台に乗せ、年初来高値水準にて越月となった。

■ 今月の見通し

7月のドルバーツは高値トライの展開を予想する。6月のドルバーツは月半ばまでは前月の流れを引継ぎ、じり安基調が続いたが、FOMCでのタカ派な内容を受けた後は、ムードが一変。14日からは9日連続での陽線引けとなり、月末にかけては年初来高値を更新し、3月以降降いてきたレンジ相場を上抜けし、32台に乗せる展開となっている。

ドルバーツ上昇の背景としては、米国の金融政策がタカ派に傾いたことに加え、タイ国内のコロナ感染が一向に収まらず、タイの経済回復シナリオが後ろ倒しになっていることが主因となるが、とはいえ、この一方向的な上昇については、目を見張る展開といえる。5月の配当フローを相応にこなし、タイのSET指数も上昇基調を辿ってきたことに加え、外国人投資家の資金流出も相応に進んでいたことから、6月はバーツが地合いが強まると思われたが、FOMC後は反転する兆しは見られず、上昇の一途を辿っている。

タイのコロナ感染拡大については、最元が最悪期にあるという印象があり、タイ国内病院のコロナ病床数が満室になっていることに加え、政府の財政出動予算も枯渇。ワクチンについても、入荷遅延という声がかかる状況であり、前向きな話は聞こえてこない。金融政策について、タイ中銀はワクチン接種状況を見て、金融政策を見極めるとのスタンスを6月のMPCでも変えておらず、タイの経済正常化に伴う利上げシナリオは程遠い状況下、タイバーツを買い進むインセンティブは低く、ドルバーツの反転期待は薄いところ。

7月には海外でワクチン接種を受けた人向けに、ブーケット県を開放する施策が開始されるが、最低でも14日間は同県内から移動できないこともあり、外国人旅行者の急増は見込めない状況。タイ政府としては、観光客誘致をタイ経済回復の起爆剤としたいと推察するところであるが、実態経済へプラスの影響が限定的であることが明らかになるにつれ、正常化への期待感是一段と剥落することも予想され、ドルバーツは高値トライを試す月になるのではなからうか。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のワクチン接種事情』

タイにおけるコロナ感染は、日に日に悪化しており、人口7千万人弱のタイでは連日4,000人近くの新規感染が続いています。公立・私立病院のコロナ病床もほぼ満床となる等、医療崩壊も意識される深刻な状況となっており、緊急事態宣言や厳格な行動規制を強めている状況下においても、感染が収まらず、国内のコロナ感染も累計25万人に到達し、半月で5万人が増える状況となっています。

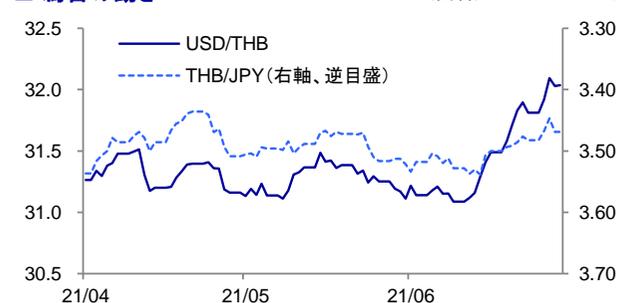
これまで何度か感染拡大の時期が何度かあったわけですが、今回の第3派の影響は過去最悪の状況となっており、政府の感染防止対策も効果をなしていない状況です。タイは国民性として非常に怖がりな性格であることから、感染防止ルールを厳格に守る様子は見受けられ、ワクチン接種についても大半の国民が早期摂取を希望していますが、政府のワクチン確保状況は芳しくありません。

タイにおけるワクチン接種は6月から開始されたものの、在タイ日本人を含め、外国人向けの摂取は未だ開始されていません。6月末現在において、タイ国内で摂取可能なワクチンは、中国製のシノバックが英国のアストラゼネカワクチン製となっており、6月中旬から私立病院では外国人向けにモデルナ製ワクチン予約受付を開始したものの、摂取可能時期は遅れる見込みとなっており、11月以降に摂取可能となる見込みです。

バンコックでは6月28日より、再び店内飲食が禁止となり、活動制限が厳格化されるなど、困難な状況が継続しており、タイにおけるワクチン接種の加速及び通常生活への回帰が待ち遠しい限りです。

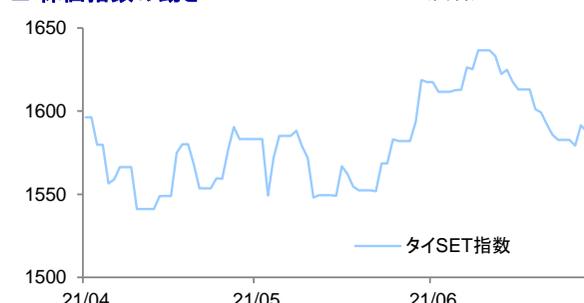
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	製造業PMI	5月	-	47.8	50.7
6/4	CPI (前年比)	5月	3.30%	2.44%	3.41%
6/4	CPI Core (前年比)	5月	0.50%	0.49%	0.30%
6/10	消費者信頼感指数	5月	-	38.90	40.30
6/23	政策金利	5月	0.50%	0.50%	0.50%
6/24	自動車販売件数	5月	-	55.9K	58.1K
6/24	輸出(税関ベース)	5月	33.50%	41.59%	13.09%
6/24	輸入(税関ベース)	5月	53.65%	63.54%	29.79%
6/24	貿易収支	5月	\$ 775M	\$ 796M	\$ 182M

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.10 ~ 4.20
 MYR/JPY 26.38 ~ 27.10
 JPY/MYR 3.690 ~ 3.790

マレーシアみずほ銀行 内田 暎

■ 先月の為替相場

6月のリングgit相場は5月に続き軟調に推移した。月初4.12台でスタートしたUSD/MYRは、下旬には昨年11月以来となる一時4.17まで上昇。月前半こそ、ワクチン普及への期待感を受け、やや底堅く推移したが、FOMCを境にリングgitは軟調な展開となった。

上旬はやや底堅い推移。1日より導入されたFMCO(フルロックダウン)に伴い、政府は新型コロナ経済対策“ペメルカサプラス”を発表。事業規模400億リング、国庫支出額50億リングの規模感で新たな財政支出額が前回比半減だったことで、発表後のマーケットインパクトは限定的。一方、同経済対策の一部に盛り込まれたワクチン普及に向けた政府の積極的な取組が各種ニュースでも報道される中、ワクチン接種者が6月に入り大きく進展している状況も確認されリングgit相場は底堅い動きを見せた。また、10日に発表された米5月CPIが市場予想を上回る結果となったが、米金利は発表後低下しドル売りとなったこともリングgitを下支えた。

中旬にかけては、16日の米FOMCが利上げ時期前倒しを示唆する内容として受け止められ、ドル高リングgit安が一気に進展した。また国内では15日にムヒディン首相が国家回復計画を発表。また、政府によるワクチン接種体制強化策により1日辺りの接種者数が20万人まで増加しワクチン普及に対する期待感が上昇した。一方、アブドラ国王が非常事態宣言下の議会早期再開を求めるなど、政局にも動きがはじめており、リングgit相場は不安定な地合が続いた。

下旬にかけては、マレーシアに対する各種向かい風の報道により、24日には約7か月ぶりの一時4.17台を付けるなど軟調に推移。先ず22日に格付機関S&Pがマレーシアのソブリン格付見通しをネガティブに据え置いた他、21年GDP成長率見通しを6.2%から4.1%へ引き下げた。MCO下も堅調に推移する輸出を通じた経済成長が下支えとなる一方、逼迫する政府財政がワクチン接種の遅れやロックダウンに伴う国内経済回復の下振れを招き、更なる財政悪化をもたらす懸念を指摘。また、世界銀行も23日に21年成長率を遠しを6.0%から4.5%まで引き下げた。25日に発表された5月CPIは市場予想4.7%に対して実績4.4%。原油高進行の中、今年3月発表の中銀年次報告書で見込んでいた5%を超えず、インフレ懸念を想起させる結果とはならなかった。

■ 今月の見通し

今月のリングgit相場は、先月15日にムヒディン首相が発表した国家回復計画による国内のコロナ対応の進展に注目が集まろう。政府は追加的な予算を投じてワクチン普及に向けた取組を官民一体で進めている。ワクチン接種会場拡充による接種率の進展に加えて注目したいのが、先月16日より官民連携方式で開始された新型コロナウイルスワクチン接種プログラム(PIKAS)である。同プログラムが順調に拡大し、感染者数の増加の一因となっていた職場クラスターを抑え込むことができれば、ワクチン接種率の上昇に加え、新規感染者数及びICU逼迫度の低下に繋がると期待される。また、アズミン上級相兼貿易産業相は、製造業で必要とされる200万回分接種は、同プログラムにより9月末までに完了予定と述べている。

外部マーケット要因として注目されるのは、やはり29日開催予定のFOMCを通じたドル金利の動向である。先月16日FOMCでパウエル議長はテーバリングの議論を開始する旨を言及している。夏場以降、つまり8月末のジャクソンホール会議以降でテーバリング開始時期が示唆される可能性をメインシナリオと見ているが、2日に発表の6月米雇用統計や13日発表の米CPIの結果次第では、29日FOMCで開始時期が示唆される可能性も留めておきたい。

また、コロナ以外のマレーシア国内動向を見ると、先月S&Pとムーディーズが相次いでマレーシアのソブリン格付について発表した。S&Pは先月1日導入のFMCOの影響を考慮し、21年成長率見通しを6.2%から4.1%に引下げ、政府債務残高に対する懸念が続くとして見通しはネガティブのまま据え置いた。一方で持続的な経済成長が下支えとなると言及した上で、パンデミック影響を見極める姿勢を見せており、すぐに動きが出るとは想定しづらい。政局については、FMCO下で今年1月に発令された約52年ぶりの緊急事態宣言は、8月1日に終了する予定と見ている。同宣言下では議会が停止されていたが、先月16日にアブドラ国王が早期の議会再開を政府に求めるなど、にわかに議会再開に向けた動きがはじまっている状況であり、ムヒディン首相の新型コロナ対応に関して、国内経済への影響長期化など野党側の批判が強まる可能性は容易に想定される。政権交代への機運が高まると、国内政局不安定化によるリングgit安が懸念されることとなる。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のワクチン接種事情』

当地ではなかなかワクチン接種が進まない状況が続きましたが、5月、6月に入ってやっとエンジンがかかり始めたという印象です。政府公表データによると、ワクチン接種完了者は6月下旬で約4.5%。一日約20万人が接種し、今後30万人までキャパシティを広げる見込みであり、7月末には人口の約10%が接種完了する予定です。マレーシアでは、米ファイザー、英アストラゼネカ、シンノバック、カンシノ、露ガマレヤ研究所、のワクチンが国家接種プログラムとして入っております。中華系の方もいらっしゃるからか中国製ワクチンの人気が比較的高い様です。当然ファイザー製の人気は根強く、ワクチンの種類は選べない一方、持病持ちや妊産婦はファイザー製となるため、SNSを見ていると、何とかファイザー製が打てる様に色々と策を講じる人もいます。

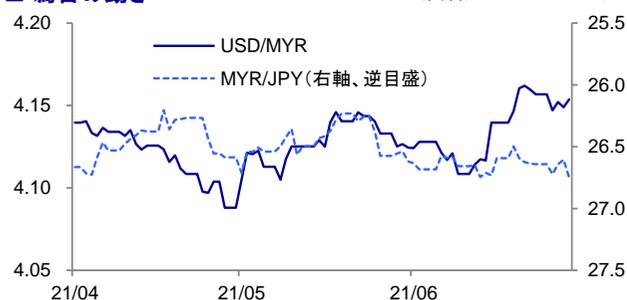
当地ではアストラゼネカ製のワクチンが年齢に関係なく数量限定で早い者勝ちのWeb申請を実施したことがありました。私を知る限り、2回行われたのですが、希望者殺到でシステムダウンしてしまい中止となりました。

接種後の血栓等の副反応が課題として取り上げられ国民にも不人気だったため、政府の国家接種プログラム対象のワクチンから除外された経緯がありました。結局Web申請の人気ぶりを確認し、今は国家接種プログラム対象ワクチンに復活を果たしています。この辺り、政府方針転換のスピード感は、見ていると気持ち良いです。

当地の拠点メンバーの中にも、希望者殺到のWeb申請を潜り抜け、無事ワクチン接種を果たした方が複数いらっしゃいます。接種会場が無事注射が完了した後に、出口のある一角で、にっこり笑って記念撮影した写真を見せてもらいました。マレー語で“予防接種打ったよ”と書かれた垂れ幕まで用意されており、困難があっても明るく前向きに乗り越えようとするマレーシア人らしさが出ています。(内田)

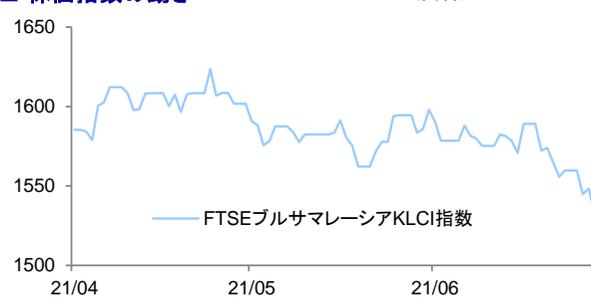
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11Jun	Industrial Production	Apr	47.9%	50.1%	9.3%
22Jun	Foreign Reserves	31Jun	—	\$111.0B	\$110.9B
25Jun	CPI (YoY)	May	4.7%	4.4%	4.7%
28Jun	Exports (YoY)	May	57.5%	47.3%	63.0%
28Jun	Imports (YoY)	May	51.6%	50.3%	24.4%
28Jun	Trade Balance (MYR)	May	20.35B	13.74B	20.48B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:	USD/IDR	14200	～	14800	(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート
	IDR/JPY	0.75	～	0.79	
	JPY/IDR	126.58	～	133.33	

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

6月のドルルピアは、ルピアが底堅く推移した後、ルピア安が進行した。ドルルピアは月初2日、14300近辺で取引を開始した。同日に発表された5月のインドネシア消費者物価指数(CPI)は、前年同期比1.67%のプラスと市場予想通りとなり為替への影響は限定的となった。材料難の中、週末5日に米5月雇用統計の発表を控えていたこともあり、14300を挟みルピアは小動きが続いた。発表された米5月雇用統計の内容は市場が期待するほどではなかったことで米金利低下を誘い、翌週初7日のルピアも確りとした推移に。その後はルピアが底堅く推移する中、10日に発表された米5月CPIの結果を受けて、市場参加者に米物価上昇は一時的との見方が広がり、米金融政策における早期利上げ期待は後退したことで週末11日のルピアは14200を割り込み月高値となる14100台後半まで上昇した。翌週14日以降もルピアは14200台で安定した推移を見せていた。しかし月後半の16日に米FOMCの結果が公表され、早期の米利上げが意識されたことで17日14300台から14400近辺までルピア安が進行。かかる中、インドネシア中銀政策決定会合結果が公表され、政策金利である7日物リバースレポレートは現状維持となった。市場予想通りの結果に、ルピアへの影響は限定的に留まった。翌18日も前日のルピア安の流れが続き14400台前半まで更にルピアは下落した。翌週21日以降も、米早期利上げが意識される中、インドネシアでのコロナウイルス感染拡大が顕著となったこともルピアの重しとなりルピアはじりじりと下落し、23日には14500手前までルピア安が進んだ。月末が近づく中、実需のドル買いにも圧迫され、ルピアは14400台の安値圏での推移が続いている。(29日終値時点)

■ 今月の見通し

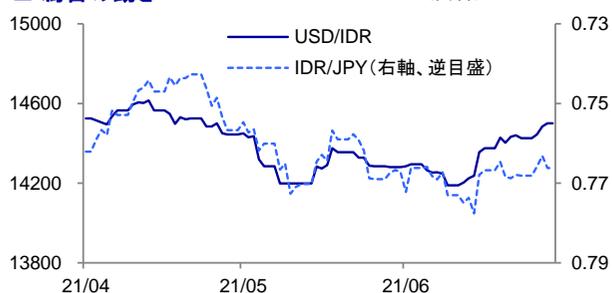
7月のドルルピアは、軟調な推移を予想する。6月、米金融政策について早期の量的緩和の縮小と利上げ時期の前倒しが意識されることとなり、以降ルピアの軟調な推移が続いている。米国でのコロナウイルスワクチン接種が進み、効果を上げている中、経済の回復は時間とともに進む可能性が高い。米金融政策正常化を意識せざるを得ない状況であり、ルピアの重しとなる。今後発表される米経済指標が良好なものとなれば、ドルルピアはルピアの下落という素直な反応を見せることとなるだろう。米経済指標及び、米要人発言から目が離せない時間が続く。一方で、インドネシアでコロナ感染拡大が起きていることも気がかりな材料。それ自体もルピア安の一時的な要因になり得るし、景気回復が後ずれすることとなると、米金融政策正常化への耐性という観点からも長期的にルピアの重しとなる可能性がある。18年のルピア安は米政策金利利上げが繰り返される中、インドネシア中銀も追随する格好でそのペース以上の利上げを繰り返したが、ルピア安の進行を防ぐことは出来なかったことは記憶に新しい。前回は国内景気が利上げを阻む状況ではなかったが、今回は、事情が大きく異なる。インドネシアでのワクチン接種は米国のそれとはかなりペースが異なり、経済活動の復活は後れを取る可能性が高い。その中で、ルピア防衛の観点から利上げをせざるを得ないという状況に追い込まれることも懸念される。中銀が身動きを取りにくいことにつけ込まれる格好での長期的なルピア安局面を迎えることも懸念される。ルピアのサポート材料となっているインドネシア貿易収支は5月も引き続き大きく黒字を計上。輸入の回復も顕著となっているがインドネシアでのコロナウイルス感染拡大は貿易黒字を維持する方向に作用することも考えられる。今しばらくは、ルピアを支える要因として留まると思われるが、米景気回復動向と金融政策の行方にドルルピアの動向は主役の座をバトンタッチしている状況であり、ルピア安を警戒すべき時間が続きそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

大変恐縮なのですが、諸般の事情により、暫くの間休載とさせていただきます。

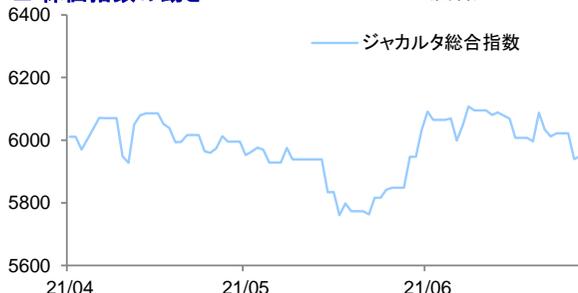
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/2	CPI(前年同月比)	5月	1.67%	1.68%	1.42%
6/8	外貨準備高(USD B)	5月	-	136.4	138.8
6/15	貿易収支(USD M)	5月	2370	2361	2286
6/15	輸出(前年比)	5月	58.65%	58.74%	52.02%
6/15	輸入(前年比)	5月	65.00%	68.68%	29.27%
6/17	BI 7daysリバースレポ金利	-	3.50%	3.50%	3.50%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 48.00 ~ 49.50
JPY/PHP 2.22 ~ 2.32

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

6月のドルペソ為替相場は約5年ぶりのペソ高水準から大幅ペソ安。

月初にフィリピン製造業PMIの改善や5月下旬からのフィリピン株式相場の急騰を受けて、一時は約5年ぶりとなる47.610までペソ高となるも、政府がマニラ首都圏や近隣州のコミュニティ隔離措置を継続したことやブレント原油価格が70ドルを突破したことからペソ安に反転。ペソは5年ぶりの高値をつけて以降は警戒感から買い進む動きにも乏しく、アジア通貨が全面的に売られる展開のなかペソも軟調となったが、米雇用統計が予想を下回り、米金利が大幅低下を受けたドル全面安から、再度、ペソ高が進み、約5年ぶりの水準となる1米ドル＝47.610に迫る1米ドル＝47.650ペソまでペソ高が進行。

その後は米雇用統計を消化し、市場の関心が10日に発表される米CPIに集まる中、米雇用統計以降のドル売りが一服し、ドル買戻し優勢となる中、フィリピン失業率が悪化したことがやフィリピン貿易統計において、予想以上の貿易赤字拡大を嫌気し徐々にペソ安が進む展開。10日に発表された米CPIが市場予想を上回る結果となったものの、物価上昇の要因は一時的なものと解釈されたことで米金利が低下し、ドル全面安となるなど、ペソは高値圏でのレンジ推移となった。

しかしながら、14日に米指標が堅調だったことを背景にドル指数が大幅上昇するなど、ドル高の流れからアジア通貨は全面安の展開。5月のフィリピン中銀の外貨準備高が減少したことも材料視されペソ安が進み、レジスタンスとなっていた1米ドル＝47.80を突破し、その後もタカ派なFOMCに対する警戒感から米金利上昇・ドル高となったほか、マニラ首都圏と周辺4州で実施している外出・移動制限の月末までの延長表明を嫌気してペソ安が進み、節目の1米ドル＝48.00ペソも突破。タカ派サプライズのFOMCを受けて、ドル全面高の展開となり、17日は1米ドル＝48.380ペソと大幅ペソ安となった。

タカ派なFOMCを受けて以降、ドル上昇基調継続は変わらず、アジア通貨が全面的に下落する流れを受けて、フィリピン株式相場は底固く推移するもペソも軟調地合い継続となり、24日には約10か月ぶりの水準までペソは下落。

■ 今月の見通し

ペソ安圧力が掛かりやすい展開を想定。

FOMCにて政策金利見通しが市場の想定以上にタカ派な結果となったことから、米金利上昇・株安に反応を見せるなど、過剰流動性により下支えされていたリスクアセットはその巻き戻しに対する思惑から軟調推移が想定され、当面はドル上昇・新興国通貨売りといった地合いが続く可能性が高い。

一時的にリスクアセットが急落するような場面が発生するかもしれないが、早期利上げ観測の一方で、テーパリングの議論開始は今会合では見送られ、具体的な示唆はなく、テーパリングについてはハト派な印象を与え、バランスを取ったものとなっていることなどからパニック的なリスクオフ相場になる可能性は限定的とみており、ペソは1米ドル＝48.80を挟んだ、1米ドル＝48.50-49.00をコアレンジとする水準での推移が想定される。

また、フィリピン中銀はここ最近のインフレ率はターゲットとしている2-4%の上限を超えて推移しているものの、持続的な景気回復を最優先とし、緩やかなスタンスを維持するとしており、24日の中央銀行の政策決定会合においても政策金利の据え置きを決定しており、米国とフィリピンの金融政策の方向性の違いから、中長期的にはペソ安方向に進む可能性が高い。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
----	----	----	----

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 72.00 ~ 75.50
INR/JPY 1.46 ~ 1.53

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【6月の米ドル/インドルピーは上伸した】

72.555で6月取引を開始、寄り付き安値でこれが当月の安値に。感染者が減少する中、インドの株式指数は史上最高値を更新。月初2営業日だけでも外国人投資家は1億9800万ドルの買い越し。ドル売り/ルピー買いフローが意識されたが、同タイミングでインド中央銀行がドル買い/ルピー売りを実施し、外国人投資家のフローを吸収していると話題でルピー高には振れず、逆に為替は原油価格上昇を見に行く展開でルピー安方向へ圧力。一週目と二週目については72-90-73.20のレンジ推移となった。

三週目に入るとインドの外貨準備高が過去最高を更新していることが確認され、政府当局によるドル買い/ルピー売りが意識される。またイラン核合意の立て直しに向けた協議が長引いていることから原油価格も底堅く推移し、こちらもドル買い/ルピー売りを想起させた。大きく動いたのは16日の北米時間に開催されたFOMCで予想外にタカ派な内容になると17日朝のルピー市場は前日比30パイサ弱ドル高/ルピー安となる73.70でスタート。この日ドルインデックスは2か月ぶり高値圏まで浮上すると、ドル/ルピーも大台74.00を上抜ける。

四週目に入ってもFRB高官から物価上昇リスクについて発言があり、FOMCの景気見通しの内容について更に後押しするかたちとなり、ドル上昇を支援。毎日徐々に高値を更新し、22日には当月の高値となる74.405を示現。月末にかけては新規材料難だったが、高値圏で推移し、74.26で29日の取引を終えた。

■ 今月の見通し

【7月の米ドル/インドルピーは底堅い展開を想定】

5月28日に72.32をつけていたドル/ルピーは6月22日には74.405と1か月弱の間に2.9%近い上昇を見せ、久しぶりの大相場となった。アジア通貨全体を指数化したアジア通貨インデックスを参照すると、この期間に1.9%の下落を示しており、インドルピーだけでなく広くアジア通貨全体が売られたことが確認できる。

背景は先述のように米国の利上げ期待が進んだことに伴ったドル資金選好が挙げられる。実際米2年国債利回りは昨年コロナショックを境目にゼロ金利になる政策金利を横目に大きく低下。今年2月には0.10%に近づくほど低下した。これが6月FOMCを経て一時0.268%へ上昇。投資資金の一部が新興国から流出し、新興国通貨安に振れるのも納得がいくところ。

次に検討の余地があるのは、アジア通貨インデックスの1.9%下落に対して、ルピーが2.9%下落しており、アジア周辺国の通貨よりもルピーは減価したのはなぜかという点である。これは原油価格の上昇で説明できる。原油価格は年初来で50%上昇、6月単月でも10%近い上昇を見せている。インドは国内需要の85%を輸入に依存しており、原油価格の上昇はドル買い/ルピー売りに直結する。また貿易赤字拡大から経常収支赤字も悪化、これが外国人投資家のルピー売り材料となる面もあり、ルピーにとって原油価格上昇は「悪いことなし」である。この点原油価格が急騰した2018年のドル/ルピー相場が思い出される。

7月の米雇用統計、物価指標が与える米金融政策見通しの影響は見極める必要はあるものの、6月FOMCにてドットチャートが変更された事実は変わらず、5月水準まで利上げ期待が後退するのは難しいのでは。原油価格が現状高値圏で推移するのであれば、ドル/ルピーも底堅い展開となろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のワクチン接種事情』

インドでは、新型コロナウイルスワクチンの接種回数累計は、6月末現在で3億回を超えている。

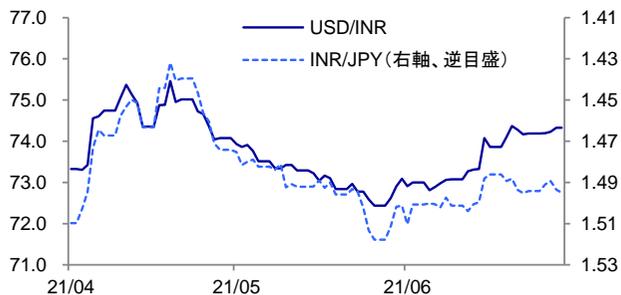
2021年1月の医療従事者等への接種開始を皮切りに、3月には60歳以上、4月に45歳以上と対象者を拡大し、5月からは18歳以上の居住者はワクチン接種が無料で受けられる。

インド当局はスマートフォンやPCで簡単に接種予約できるようなシステムを作った。筆者もアプリで予約し、1回目の接種を終えた。予約したクリニックに赴いて身分証明書を提示すれば、ほどなく簡単な問診の後で医師による接種が行われた。その日の夕方には予約時に登録したメールアドレスにワクチン接種証明書のソフトコピーが送付され、そのスムーズさには感心した。

5月以降、インド全土でワクチンが品薄となり、一度も接種できていない同僚もいる。いまだインドでのワクチン接種率は、1回が25%、2回完了が4%にとどまっているものの、ここ数週間で急速にワクチン流通の状況が改善されてきた。予約アプリは地図検索や接種予約ができるようになり、こまめにアップグレードされている。その進化具合を見るのが小さな楽しみである。(バンガロール・木原志乃)

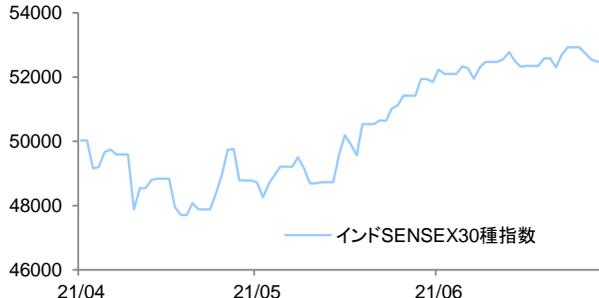
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	製造業PMI	5月	-	50.8	55.5
6/4	レポレート	-	4.00%	4.00%	4.00%
6/11	鉱工業生産	4月	121.1%	134.4%	22.4%
6/14	CPI	5月	5.38%	6.30%	4.29%
6/15	貿易収支	5月	\$7.1bio赤字	\$3.2bio赤字	\$6.8bio赤字

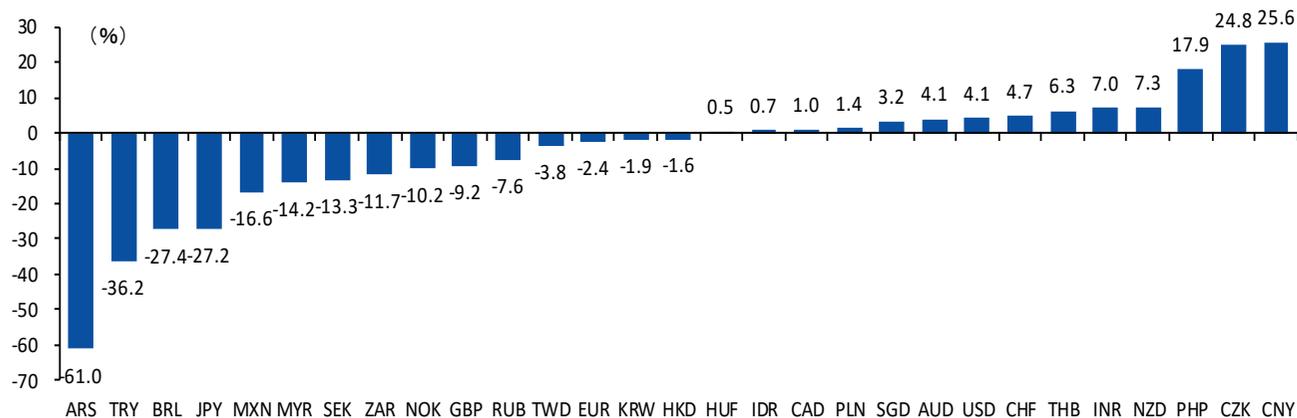
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2020年末	2021年6月末	騰落率	株式市場	2020年末	2021年6月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	30606.48	34502.51	12.7%	-
日本	USD/JPY	103.25	111.11	7.6%	日経平均株価	27444.17	28791.53	4.9%	-2.5%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2216	1.1858	-2.9%	ドイツDAX指数	13718.78	15531.04	13.2%	13.2%
英国	GBP/USD	1.367	1.3831	1.2%	ロンドンFTSE100指数	6460.52	7037.47	8.9%	7.7%
豪州	AUD/USD	0.7694	0.7498	-2.5%	S&P/ASX200指数	6587.096	7313.023	11.0%	13.9%
カナダ	USD/CAD	1.2725	1.2398	-2.6%	S&Pトロン総合指数	17433.36	20165.58	15.7%	18.7%
エマーゼンジア									
中国	USD/CNY	6.5272	6.4571	-1.1%	上海総合	3473.069	3591.197	3.4%	4.5%
香港	USD/HKD	7.7531	7.7651	0.2%	香港ハンセン	27231.13	28827.95	5.9%	5.7%
インド	USD/INR	73.07	74.3288	1.7%	インドSENSEX30種	47751.33	52482.71	9.9%	8.0%
インドネシア	USD/IDR	14050	14500	3.2%	ジャカルタ総合	5979.073	5985.489	0.1%	-3.0%
韓国	USD/KRW	1086.51	1126.28	3.7%	韓国総合株価	2873.47	3296.68	14.7%	10.7%
マレーシア	USD/MYR	4.0203	4.149	3.2%	ブルサマレーシアKLCI	1627.21	1532.63	-5.8%	-8.7%
フィリピン	USD/PHP	48.03	48.81	1.6%	フィリピン総合	7139.71	6901.91	-3.3%	-4.9%
シンガポール	USD/SGD	1.3221	1.3454	1.8%	シンガポールST	2843.81	3130.46	10.1%	8.2%
台湾	USD/TWD	28.094	27.875	-0.8%	台湾加権	14732.53	17755.46	20.5%	21.5%
タイ	USD/THB	29.959	32.03	6.9%	タイSET	1449.35	1587.79	9.6%	2.5%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2021年5月時点)



■ 実質GDP成長率

	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2019	2020
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.6	2.4	-5.0	-31.4	33.4	4.3	6.4	2.2	-3.5
日本*	0.5	-7.4	-2.0	-28.6	22.9	11.7	-3.9	0.0	-4.7
ユーロ圏	1.4	1.0	-3.3	-14.6	-4.1	-4.7	-1.3	1.3	-6.5
英国	1.4	1.2	-2.2	-21.4	-8.5	-7.3	-6.1	1.4	-9.8
豪州	1.9	2.1	1.4	-6.2	-3.7	-1.0	1.1	1.9	-2.4
カナダ*	1.8	0.4	-7.9	-38.1	41.7	9.3	5.6	1.9	-5.3
エマーゼンジア									
中国	5.9	5.8	-6.8	3.2	4.9	6.5	18.3	6.0	2.3
香港	-3.2	-3.6	-9.1	-9.0	-3.6	-2.8	7.9	-1.7	-6.1
インド	4.6	3.3	3.0	-24.4	-7.4	0.5	1.6	8.3	6.8
インドネシア	5.0	5.0	3.0	-5.3	-3.5	-2.2	-0.7	5.0	-2.0
韓国	2.0	2.3	1.5	-2.5	-0.8	-0.7	1.9	2.2	-0.9
マレーシア	4.5	3.7	0.7	-17.2	-2.7	-3.4	-0.5	4.3	-5.6
フィリピン	6.3	6.6	-0.7	-17.0	-11.6	-8.3	-4.2	6.1	-9.6
シンガポール	1.1	1.3	0.0	-13.3	-5.8	-2.4	1.3	1.4	-5.4
台湾	3.3	3.7	2.5	0.4	4.3	5.2	8.9	3.0	3.1
タイ	2.7	1.3	-2.1	-12.1	-6.4	-4.2	-2.6	2.3	-6.1

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	20/10	20/11	20/12	21/01	21/02	21/03	21/04	21/05	2019	2020
	(%)								(%)	
先進国										
米国	6.9	6.7	6.7	6.3	6.2	6.0	6.1	5.8	3.7	8.1
日本	3.1	3.0	3.0	2.9	2.9	2.6	2.8	3.0	2.4	2.8
ユーロ圏	8.5	8.3	8.2	8.2	8.2	8.1	8.0		7.6	8.0
英国	4.9	5.0	5.1	5.0	4.9	4.8	4.7		3.8	4.4
豪州	6.9	6.8	6.6	6.4	5.9	5.7	5.5	5.1	5.2	6.5
カナダ	9.0	8.6	8.8	9.4	8.2	7.5	8.1	8.2	5.7	9.6
エマーゼンジア										
中国			4.2						3.6	4.0
香港	6.4	6.3	6.6	7.0	7.2	6.8	6.4	6.0	2.9	5.5
インドネシア									5.1	6.0
韓国	4.2	4.2	4.5	5.4	4.0	3.9	3.7	3.8	3.8	4.0
マレーシア	4.7	4.8	4.8	4.9	4.8	4.7	4.6		3.3	4.5
フィリピン	8.7			8.7	8.8	7.1	8.7		5.1	10.4
シンガポール			3.3			2.9			2.2	3.0
台湾	3.8	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7		3.7	3.9
タイ	2.1	2.0	1.5						1.0	1.6

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	20/10	20/11	20/12	21/01	21/02	21/03	21/04	21/05	21/06	2019	2020
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	1.2	1.2	1.4	1.4	1.7	2.6	4.2	5.0		1.8	1.2
日本	-0.4	-0.9	-1.2	-0.6	-0.4	-0.2	-0.4	-0.1		0.5	0.0
ユーロ圏	-0.3	-0.3	-0.3	0.9	0.9	1.3	1.6	2.0	1.9	1.2	0.3
英国	0.7	0.3	0.6	0.7	0.4	0.7	1.5	2.1		1.8	0.9
豪州			0.9			1.1				1.6	0.9
カナダ	0.7	1.0	0.7	1.0	1.1	2.2	3.4	3.6		1.9	0.7
エマーゼンジア											
中国	0.5	-0.5	0.2	-0.3	-0.2	0.4	0.9	1.3		2.9	2.5
香港	-0.4	-0.3	-1.0	2.6	0.5	0.6	0.8	1.0		2.9	0.3
インド	7.6	6.9	4.6	4.1	5.0	5.5	4.2	6.3		3.7	6.6
インドネシア	1.4	1.6	1.7	1.6	1.4	1.4	1.4	1.7		2.8	2.0
韓国	0.1	0.6	0.5	0.6	1.1	1.5	2.3	2.6		0.4	0.5
マレーシア	-1.5	-1.7	-1.4	-0.2	0.1	1.7	4.7	4.4		0.7	-1.1
フィリピン	2.5	3.3	3.5	4.2	4.7	4.5	4.5	4.5		2.5	2.6
シンガポール	-0.2	-0.1	0.0	0.2	0.7	1.3	2.1	2.4		0.6	-0.2
台湾	-0.3	0.1	0.1	-0.2	1.4	1.2	2.1	2.5		0.6	-0.2
タイ	-0.5	-0.4	-0.3	-0.3	-1.2	-0.1	3.4	2.4		0.7	-0.8

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2019	2020
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.3	-2.2	-2.1	-2.5	-2.6	-2.9	-3.2	-2.2	-2.9
日本	3.3	3.4	3.4	2.9	2.9	3.3	3.4	3.4	
ユーロ圏	2.3	2.3	2.0	2.2	2.0	2.2	2.4	2.3	2.2
英国	-4.4	-3.1	-2.4	-2.3	-2.2	-3.5	-3.2	-3.1	
豪州	0.2	0.7	1.2	1.8	2.0	2.6	3.1	0.7	
カナダ	-2.3	-2.1	-2.1	-2.1	-2.0	-1.8	-1.0	-2.1	-1.8
エマーゼンジア									
中国	0.9	0.7	0.3	0.9	1.3	1.8	2.4	0.7	
香港	5.6	5.9	4.7	5.8	6.9	6.5	9.0	5.9	
インド	-1.6	-1.0	-0.8	0.4	1.3	1.3	0.9	-1.0	1.3
インドネシア	-2.9	-2.7	-2.4	-2.1	-1.3	-0.4	-0.2	-2.7	-0.4
韓国	3.8	3.7	3.8	3.6	3.8	4.4	4.9	3.7	
マレーシア	3.5	3.3	2.8	2.5	3.5	4.4	4.6	3.3	
フィリピン	-1.0	-0.1	0.4	1.5	2.6	3.5	3.3	-0.1	
シンガポール	14.8	14.3	14.8	15.6	16.8	17.6	18.6	14.3	17.6
台湾	11.3	10.6	10.4	10.7	12.8	13.9	14.6	10.6	13.9
タイ	6.1	7.0	6.7	6.3	5.8	3.5	0.9	7.0	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在(%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準(%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2021/6/16	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2021/6/18	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2021/6/10	現状維持
英国	バンク・レート	0.10	緩和: 2020/3/11	0.75	2020/3/19	-15bp	2021/6/24	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	0.10	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/11/3	-15bp	2021/6/1	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2021/6/9	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.85	緩和: 2012/6/8	6.31	2020/4/20	-20bp	2021/6/21	現状維持
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2021/6/4	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.50	緩和: 2019/7/18	6.00	2021/2/18	-25bp	2021/6/17	現状維持
韓国	7日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/7/18	1.75	2020/5/28	-25bp	2021/5/27	現状維持
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2021/5/6	現状維持
フィリピン	翌日物金利	2.00	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/11/19	-25bp	2021/6/24	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2021/6/23	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBILレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行